我こゝに足るを知る、敢て足らざるを歎かず、

されど我の足るを知るは、足るを知るべき點に於てのみ、足るを知らざる點また別にあり、

我いまだ年少氣鋭の頃、常に曰く、住めば魏々たる大廈高樓を起すべし、住まざれば天下に放浪して四方いたるところに轉寢すべしと、

後年、實際の家を作るに當りては、その言の十分一を行ふ能はず、行ふ能はざれど、住むに不自由なき現在の家を以て足れりとす、

前後左右に廊下を通ぜし二階の十疊二室を以て書齋とし客間とし、これ以上を望まず、階下の十疊二室を子女七人に與へて、別に遊戯の廣き廊下を廻らし、これ以上を許さず、母は殊更ら四疊半を好み給ふが故これを新築し、妻は常に所謂る茶の間を室として臺所に近く、玄關その他を除くの外は書生と下女の居所にして、一家二十人に足らざるもの寢るに不足なく居るに不便なく、家は衛生のため三階の寸尺を以て二階建とし、用材は堅牢のため悉く檜を以て耐震家屋とし、庭に泉石の奇なきも樹木鬱蒼として、鬱蒼の下また子女の遊戯に餘地あり、厠は階上階下いづれも世間よりは廣く作り、湯殿は家族の浴に狹からず以て堂々たる鐵骨石皮の洋館を羨まず、以て他人の魏々たる邸宅の宏莊を羨まず、以て閑雅なる別莊を羨まず、以て馬車を羨まず自動車を羨まず、こゝに蟠居して晏如たり、

門を作る時、大工に命じて曰く、決して立派なるべからず、されど吝々ずべからずと、我その繪圖面を製し、また塀を廻らす時、世間普通よりは六寸を低くせしむ、盗の入るを恐るゝものありしが、笑うて云ふ、世間普通より高くしても這入る盗賊は這入るべし、あまり丈夫に高く圍へる塀は監獄に似たり、あまり要害堅固に忍び返しの繁きは、金持と間違はるゝ恐れあり却ツて用心にならずと、

主人の自書は來客に無禮なりといへど、我は我主義として我室に四字の扁額を掲ぐ、

身貧心富

これに菜根譚の一文を附記す、

我貴而人奉之、奉此峩冠大帶也、我賤而人侮之、侮此布衣草履也、然則非奉我、我胡爲喜、原非侮我、我胡爲怒、

鄰室に掲げて曰く、

菩薩心夜叉手

聊か以て我居家處世の一端とす、

母は今年七十二歳、二十一歳より未亡人となりて、貧苦の中に我を育て給ひし親一人子一人の母子なり、我の富まざるを更に憂ひ給はず、また我の奉養に足らざるを咎め給はず、

鑊鑠として心のまゝに市中郊外を散歩し、嬉々として朝夕に孫を愛し孫と戯れ給ふ、殆ど老の其身に至るを知らざるが如し、我に於て人生第一の幸福とす、

妻は壯健なる八人の子を産みし妻として、また唯命これ從ふ妻として、これ以上に求むるところなく滿足せり、

男子四人、女子四人、其うちの男子一人は襁褓中より親友の養子となり、家にあるもの七人、長女長男ともに府立の第一中學と第一女學校に通ひ、四人は日々小學校に通ひ、ちよろ〳〵歩き出せし三歳の女子一人、母に抱かれ祖母に抱かる、いづれも生來いまだ病めるものなし、

由來の下女は悉く我家より嫁し、今の下女は幾度も約束の期を重ねて出でず、乳母は既に乳の用なくして去らず、多年の忠僕に川越屋なるもあり、壯年の頃は盛に米屋を營み、

我また向島にありし時その米を購ひしが、人に欺かれて産を失ひ、不幸にして落魄の極、來り投ぜしもの、今年五十六、もはや我家に死せむとし我も生涯を我家に終らしめむとし口に馴れたる元の屋號を其まゝ呼んで川越屋といふ、朴訥にして純潔、容貌の原始的に奇なるのみならず、殆ど今人にあらざる天性の正直律義は、をり〳〵當世の人と爭うて太古的の理窟を揑ね廻すの癖あり、何人を選ばず凡そ我家に久しく出入するもの、この川越屋の理窟詰めに逢はざるものなし、家族一時に聲をあげて笑ふ時は、必ず川越屋の眞面目なる滑稽より起る、門外一歩いかに競爭激烈の修羅場たるも、この川越屋によりて常に太平の象あり、蓋し我家の名物男とす、

新聞に雜誌に著書に演說に、いたるところ近來頻りに叫ばるゝ家庭圓滿の語、いかにしても我その不思議に堪へず、そも〳〵家庭圓滿なるもの、さほどに喧しく騷ぐほどの價値ありや、さほどに難しきものなるや、

新舊思想の衝突なりとか、總ての上に過度時代なりとか、或は家族制度の如何にありとか乃至また結婚の不備にありとか、その他さま〳〵の理由より起るものとすれば、そンな糞面倒な理由さらに一點なき我家を以て誇るにあらず、これが一家の當然なりと心得もせず氣にも止めず、母も我も妻子も無事なり、

また衣食住に窮するを人間生存の恥辱とすれど、遺産相續稅の多きを人生の權威ともせざる我には、强ひて子孫のため財を積むの用なく、たゞ親として子に對する教育資金を缺くべからずと思へるのみ、これを以て我また足れりとす、

朝は必ず五時以前に起き、二十年來こゝに二食の我は朝飯の世話なく、まづ掃除せる二階の廊下に出でゝ椅子に倚り、庭前の樹木と相對して茶を啜り莨を吸ひ、大阪の二新聞と都

下の八新聞これを讀むといふよりも、これに大體の目を通せし後、もし幸ひに來客の妨げなき時は、隨意の身を以て適意の境に入る、その間に於ける我は天下何物にも犯されず煩はされず、社會といへる觀念一切この頭腦より除却されて、たゞ我あるのみの快いふべからず、身は貧なれど實に心は富めり、寧ろ世間の身は富んで心の貧なる人を憫れむ、夜さらに用なき時は、家族と團欒して理も非もなき談笑に耽り、外に出でて歸るの遲き時は、十時と十一時の間を期して悉く家族を寢しむ、睡い目を擦りながら主人を待つが如きは最も我の唾棄するところ、門は既に閉ぢたれど勝手口より入りて、冬は書齋に火鉢の火と鐵瓶の湯の絶えざるを足れりとし、夏は手近に團扇と著替の浴衣と水菓子のあるを以て足れりとす、勞れたる時は小兒の如く直に蚊帳へ轉げ込み屋具へ這ひ込み、勞れざる時は靜なる夜の世界また我一人の有となり、その世界の王たるも將たるも英雄たるも自由自在の快さらに譬ふべからず、寧ろ書を讀み筆を執りて曉に徹する如きは稀なり、これを以て居家に何の不足なく足れりとす、

書畫骨董に多少の趣味あれど、これを購ふ金をく、金の工面までして求むるほどに欲しからず、衣服調度に一切の流行を追はずして、四季をり〳〵に不自由なきを足れりとし、たゞ食物の嗜好に他より見れば聊か身分不相應なるのみ、我この食物を以て人間社會に於ける活動機關の石炭とす、石炭だけは及ぶかぎり質を選ばざるべからず、酒は飲まず、玉突は面倒なり棊將棊は嫌なり、いかに奢るも茶は所謂る茶人の茶にあらず、莫は四年以來こに外國產を禁じて、その頂上を用ふるも知れたものなり、

富豪の目より見れば、土藏なく茶室なく、出づるに車馬なく入るに洋館なく、定めて不自由なるべし、されど我は不自由なく以上これを以て足れりとし、生活狀態これ以外に求む

るところなし、たとひ求め得らるゝも我は求めず、もし餘力あれば、今なほ他に向ひ他に用ひむとす、二十餘年以來、家を成して足るを知れる中に足るを知らざる點また別にあるは、これがためなり、

事は志と違ひ、人生の幾波瀾、何の得るところもなく、いたづらに閑文字を以て人に知らる、

家に足りて世に足らざるものと、世に足りて家に足らざるものと、幸不幸、それ孰れぞ、

戀

戀を說くもの古今東西に絕えず、戀を詩的に美化せるもの近來さらに多く、戀愛本能の講釋も戀愛神聖の有難味も殆ど聞き飽いて、もはや戀に關する著書も談話も蒼蠅し、

されど戀より見れば、賢愚なく貧富なく階級なく人は悉く戀の動物にして、いかなる人間も一度は必ず戀せざるものなく、甚だしきは生涯この戀の奴となりて終る、

この戀を筆にせず口にせず、この戀を以て世間の人に對し、その人の眞面目なる顏を見れば、自然に一種の滑稽を禁じ得ずして、おもはず吹き出すことあり、

最も呵しきは、旅行的の長き汽車汽船よりも、新陳代謝の絕間なき市中電車の滿員中、ずらりと見渡して、皆これ戀の動物かと思へば、その動物の種々なる面を押し並べし陳列の工合、實に面白し、

いかめしき髭面、すさまじき大面、さも分別らしき仔細顏、さも律義らしき正直顏、君子めいたる容貌、學者らしき風采、教育家の謹嚴、宗教家の冷靜、會社員の忠實、官吏の精勤、その他いづれも油斷なく緊張せる目鼻を押し並べて、我劣らじと大に澄まし込めど、

身分相應それ〴〵の戀に憧れ、いち〳〵これが一度や二度は女の尻を追ひ廻せし嫌な奴かと思へば、凡そ人間ほど內外表裏のあるものなし、

彼奴あの面で全體どういふ女を追ひ廻せしかと思へば、一篇の滑稽小說を讀むよりも呵しく、此奴この妙な面で實際どこまで女に遁げられしかと思へば、一場の喜劇を見るよりも面白く、中には女に纏ひ付かれ女に追はれて困りし人間もあるべし、また歲暮の鮭に等しく吊皮にブラ〳〵しながら現在その電車中の女に見恍れて乘り越す奴あり、わざ〴〵切符を損して女の尻より不意に飛び降りる奴もあり、看來れば千差萬別いづれも戀の動物、一電車毎に間斷なく運ばれて滿員また滿員、

電車のみにあらず、人を訪うて應接所に相對する時、人と議論する時、人と喧嘩する時、人と談判する時、いかに豪さうな面をしても、この面また女に關して目も鼻もなく雜作を崩せしかと思へば、さのみ豪からずして折角の名論卓說も憤怒勵聲も屁の如し、

我は近來の高尙めいたる戀愛說よりも、かゝる點に於て最も戀の力の偉大なるを認む、

女また男に對して同じきのみならず、絕世の美人も厠に入りて誰憚らぬところを想像すれば、多少お氣の毒の感あり、

びッくり

びッくりの語、驚愕の文字を用ふ、

我友人中、常に豪傑を以て自任するものあり、いかなる事にも未だ曾て驚きし事なく、いかなる時にも未だ曾て恐れし事なく、實際その事に當りて泰然自若たるは多年の我これを知る、

一日この友人、來りて曰く、うまれて始めて今日、びッくりせりと、びッくりの原因を問へば、娘を嫁に貰ひに來たと、

長女十八歳、嫁に貰はれても、びッくりする年齢にあらず、さるを萬事に無頓着なる豪傑うか〳〵として歳月流るゝが如く自己の頭に霜は頂けども、朝夕の手許に愛撫せる我子なほ小兒の如く思ひ、突然この小兒を世間より嫁にくれといはれてびッくりせしなり、

我子の年齢を知らざる親なく、女子十八歳の新婚を不思議がる筈なく、世間普通さらに何の驚くべき事なきに、この豪傑これに今更ら驚いて、びッくりせし一刹那は實に父子情愛の極といふべし、

その後また來りて曰く、乃公は急に三四年も年を取ッたと、我この一言を聞くや、子のために春の早きを祝し父のために秋の早きを歎ぜり、

火事に驚き地震に驚き盗賊に偷まれて驚き借金取に出喰して驚くもの、いかに驚くも我その驚きに何等の感なし、たゞ娘を嫁にくれといはれて、びッくりせし朋友のため人生無量の感に打たる、

歳月は人を待たず、今この友人の驚きは、やがて他日また來りて我の驚きなるべし、

病中の感

我うまれて茲に五十年、いまだ曾て醫藥の何物たるを知らず、近來の世間に喧しき衛生とか養生とかいふが如きものは他人の必要語にして、我には殆ど馬耳東風、さらに何等の關するところなく、もし世の中に容貌魁偉を論ぜずして完全無缺の健康體を求むれば、恐らく我は其の標準的の第一人者たるべしと誇りしに、多年この誇りは一朝こゝに抹殺された

り、

家にありて三十八度内外の熱に冒されし時は、出入の知己朋友さらに我を病人扱ひにせず、我また自ら病人とならずして、盛に洒落れ飛ばし盛に氣焔を吐きしが、三十九度の熱に聊か身體の異狀を感じ、四十度以上四十一度餘に至りて始めて愕然たり、

昔ある人、その死に臨みて、俄に筆を執りし狂歌一首、

今までは人の事だと思うたに
　おれが死ぬとはこいつたまらぬ

我また病氣は他人の事とのみ思ひしに、今や現在この身に襲ひ來りて、こいつたまらぬの感あり、

肺結核の如きは熱度の上るに從うて寧ろ氣分よく快を覺え、その他また常に虚弱の病身は多少の熱に馴れて、さのみ苦しく驚かざるを、生來健全の我體質に四十度以上の熱は殆ど人間の一大變事なり、

俄に電話を以て友人眞下正太郎氏を呼ぶ、多年の交友、眞下氏を醫學士として招きしは我こゝに始めてなり、

眞下醫學士、その職に來る事の不幸を歎じ、加之も診察して殊更に病狀を語らず、たゞ一語に膝を進めて云ふ、君の如き强情我慢の人間は家にありて友人の我手に迚も醫すべからず、一刻の猶豫なく直に入院すべしと、恰も敵を追ふが如くに急き立てゝ其まゝ病院に送らる、

送らるゝ時、寢馬車にせんか、自動車にせんか、乃至また吊臺に運ばんかと、數人枕頭の聲この耳に入るや否、我おもはず一喝して曰く、馬鹿いふな俥にて澤山なりと、强ひて俥

に乗りしが、途中、流石に苦痛を覺えしのみか、生來いまだ病を知らざる我身體に突然この大熱、もし此まゝに數日を持續せば、その結果いかならんと、今日の進歩せる醫術に信頼する念よりも、寧ろ我人生に一種の不安を起して、うたゝ寂寞の感に打たる、

病院これ監獄

特等の一等室のといへど、この特等も一等室も病院より割り出せる物質的の程度にして、五十年の生來こゝに始めて入院せる我には、現在の病苦以外、また別に堪へ難き深刻の苦痛と不快とを感ぜり、いまだ經驗なきも想像のおよぶところ正に是れ監獄に投ぜられたる囚人の如し、

そも〳〵人間は生涯に病なく活動し、その活動の止むと共に自然の老衰に入り、老衰の極に終るべき天然の壽に終るを以て遺憾なき人生の終焉とし、また完然なる人生の幸福とす、人は病の器といふが如き語は、虚弱病身を以て人間の常態とせる怨嗟の悲鳴にして、人は病むべからざる約束の下に生れ、人は健全に終るべき時期の下に死すべきものなり、病院の一室に苦熱を忍びつゝ夜更けし後、誇れる五十年の健康を一時に奪はれて、ベットの上に横はれる我、以上の信念と覺悟とを以て斷言す、病は是れ自己の罪なり、人間の疾病は正に是れ人間の罪惡なりと、

病を罪とせるは頗る冷酷の言に似たれど、避け難き突發の運命、即ち不可抗力の災に身を害ふ以外、疾病の多くは自己の不用意より生じて、傳染病の如き他より犯さるゝもの亦これ自己の不注意に歸すべく、全然その不用意も不注意もなくして生れながら虚弱の病身は、いづれか父祖の罪を背負ひ來りしもの、若しくは遠き隔世遺傳の罪科に處せらるゝも

のといふべし、その不幸は本人に對して同情に堪へされど、血と肉とをうけたる子孫は免れ難き因果の理に於て如何ともする能はず、父母より健全の體質を賜はりながら墮落放蕩のために得たる梅毒患者の如き奴は、正しく覿面の重罪犯なり、

いづれにせよ、病を罪とすれば、病院これ直に監獄なり、監獄の囚人は一般の社會と隔離せられ、嚴重なる監内に繫がれて外面一歩も出づるを許されず、病院の患者また世間と沒交渉にして、加之も出入は自由なれど本人みづから動く能はざるベットの上に横臥し、日夜の看護婦これ監視監守と等しく、院長は正に典獄なり、外より來る見舞人の見舞物は監獄の差入物にして、重病者の見舞物を醫師より禁ぜられるゝは重罪人の差入物を獄則に禁ぜらるゝが如く、患者の室に面會謝絶の札を掲げらるゝは罪人に面接禁止あると等しく、囚人の襟に番號を附せらるゝは患者の病室に番號あると一般なり、一度ならず二度ならず入院する患者は二犯三犯の前科者と等しく、罪また重く病また重し、退院の時日に長短あるは恰も刑期に長短あるが如く、不幸にして入院中その醫藥の效なく死するものは、氣の毒なれど或意味に於て死刑囚なり、

第一まづ始めに醫者より診斷せらるゝは、司法官に刑罰を宣告せらるゝ所以にして、我この病院に投ぜらるゝ時、主治醫の曰く、凡そ三週間にして全癒すべしと、卽ち我は幸ひにして初犯の輕罪たるを知れり、

但し此輕罪犯たる我、始めの一週間は神妙に獄則を守れる囚人の如く、餘儀なくベットの上に呻吟して、いかにも病人らしかりしが、實は元來の健康體、殆ど醫術上のレコードを破りて意外に早く、次第に苦熱の降下するや、そろ〳〵我まゝを演じ出して、看守、否、大に看護婦の持て餘すところとなり、十二三日の後、三十七八度の熱となりし頃は、もはや

病の苦痛を忘れて監禁の苦痛に堪へず、幾度か破獄を企て、逃亡せむとせしが、醫者の許可せざると看護婦の深切と友人の諫めとに押へられて、たゞ偏に刑期の滿つるを待てり、

病院の深夜

病症それ〳〵その輕重ありと雖も、病は人間の缺陷にして、既に健康體を失へる以上、もし一歩を過れば、まづ生よりも死に近しといふべし、さらに嚴格なる意味を以て論斷すれば、いづれも皆これ死に損ひの人間こゝに收容せられたるもの、これを病院といふ、輕き病は家にありて治療すべく、ぴち〳〵する奴の居るべき筈なく、いかに外觀は巍々たる堅牢の洋館も、實は人生不幸の脆き涙に建てられて、廣き院内は常に絶えず一種異様の臭氣に滿たされ、各室いづれも無限の憂愁に閉され不安の悲哀に包まれて、血色を失ひし蒼白き顏面、見る影もなく衰弱せる身體、その重きは半死半生の間に蟲の息を呼吸せる哀れさ、これを日は沒し夜に入りて電燈の影闇き深更に至れば、四方の物色いよ〳〵悽慘の氣を加へて陰鬱たる寂寞中、かち〳〵と看護婦の氷を碎く音、ひそ〳〵と附添人の廊下に出でて私語く聲、いづこともなく重き患者の唸る苦痛を聞きながら、たゞさへ淋しき病室に睡りもやらず横臥せる心地は、たしかに三週間を以て全癒を誓はれたる我身にも、いふべからざる一種の鬼氣に襲はれ、何となく人間の果敢なき無情に誘はれて、この一刹那この同じ病院中に今や息を引取るものあるかと思へば、我を掩へる白き毛布一枚、俄に寒し、ベットの上に頭を擡げて枕許の時計を見れば、正に午前二時十七分、手を伸べてカーテンを絞り半ば開け放ちたる窓より天を仰げば、薄墨を流せる如き宵の雨雲こゝに更け渡りて力なく光り薄き星影の三つ四つ、朧に我を窺ふが如し、この時刻これと等しき夜色に接せ

しことは屢々ありしが、人は脆く居は氣を移すの諺に漏れず、重からざるも身は病めり、いつしか打沈める心に亡友幾人を數へ來れば、目を閉ぢざれど、あり〳〵と我前に現はる、

健康の感謝

我の知れる華族中、いはゆる舊大名の最も富める人にして、うまれながらの虚弱病身なるものあり、常に歎じて云ふ、もし三年の健康を得れば現在の地位と財産全部とを擧げて郎座に購ふべし、もし五年の醫藥に接せざれば其まゝ直に殺されて死すとも可なり、せめて一年に一日、無病の愉快を千金に求めたしと、その出づる毎に世間の往來を見て、妻子饑餓に泣く辻待の車夫を羨み、生涯貧苦に追はるゝ大道の土方を羨み、雨に風に食ふや食はずの立ン坊を羨み、炎天寒風の高き柱に攀ぢて猿の如くに働ける電信電話の工夫を羨み、果は自己の乘れる馬車の内より鞭たれて疾走せる馬の健全を羨むに至るといふ、この華族たらざるも、大廈高樓に病んで車夫馬丁の健康を羨む天下の富豪それ幾何ぞ、僅に三週間を以て全癒を誓はれし我身も、五十年の今日こゝに病んで後、始めて過去五十年の健康を有難く思へり、徒らに其の健康を人に誇りしは、我いまだ自己の健康に感謝するを知らざりしなり、

病んで始めて健康の有難きを知ると共に、その健康體さらに一日も空しく過すべからざるを知る、

虚弱の人より見れば、いかに健康體の尊きぞ、一日千金に購はんとして、加之も購ひ得ざる無病息災に生れながら、人生この最大幸福を感謝奮勵の用に供せず、たゞ徒らに無意味の生涯を送るものは、あまりに人間その自己を蔑視し過ぎたり、

三十七度二分に熱の下りし時、我また始めて過去の奮勵の足らざるを知る、もし單に健康のみを誇れば、人間よりも寧ろ犬猫の類は更に幾倍の健康體なり、

病氣見舞

病氣を見舞ふといふ事は、自然の人情と社會の交際上、缺くべからざる大切の禮儀にして最も敬愛を意味せる美點の表現なれど、この見舞客その多きに過ぎては見舞はるゝ病人、寧ろ却ツて有難迷惑の感あり、

始め家にありて我の病むや、これを現在その場に目擊せる友人さへ殆ど意に介せず、突然四十度以上の熱に至りて我も人も俄に驚き、いよ〳〵病院に運ばるゝや、いまだ曾て醫藥に接せざる多年の頑健を知れるだけに、猶更ら驚いて實際の病症よりも非常に重く見られ家人を戒めて一切いづれにも通知せざりしが、聞き傳へて押し寄せ來りし見舞客の雜踏に病室の內外を塞がれ、芳志は感謝するに餘りあれど、一面また例の有難迷惑を殆ど極度に受けたり、

さらに絕え間なき見舞客の混み合ふのみならず、見舞物と稱して贈らるゝ菓子果物の類、また處置に窮せり、積んで山の如しとは形容詞なれど、重ねて病室の隅々に置き切れざる贈り物これを奈何せん、只その好意のみを拜受して、實は內々そツと他へ運び去らしむるの外なし、結局は一の虛禮に終る、

加之も多くの病人は醫者より食物を制限せられたるもの、たとひ制限せられざるも、既に病人となれば多くの場合、これを喜んで口にするものなきを知りながら、これを贈らざれば病氣見舞の資格なきが如く、また他の見舞客に對して殆ど恥の如くに思へるは、寧ろ

誠實なる人情の流露にあらずして、或は世間體といふ一種の虚榮的を帶びたる習慣上より來りしにあらずやと疑はる、

これを一種の習慣とすれば、決して惡習慣にあらざるも、また決して最善の習慣にあらず、もし親愛なる病人に物質上の好意を表せんとすれば、第一まづ其贈り物を醫者に聞くべし、然らざれば口にすべき一切の食物を廢して、居ながら病人の目を喜ばしむるものを贈るべし、食ふ事の出來ざる菓子折を積まるゝよりは、枕頭一輪の香氣ある花に如かず、累々たる果物の籠に限りある病室の場所を塞がるゝよりは、幾鉢の植木を並べて一掬清涼の氣を起さしむべし、平生その病人の嗜好せる美術品を日々に取替へて陳列するも可なり、乾燥無味なる病室の壁に幽邃閑雅なる畫幅を懸けて慰むるも可なり、加之も强ち與ふるを惜しめば贈るに及ばず、病人の病院にある間これを貸せば足れり、蓋し病めるものは最も適切に精神上の慰安と娯樂とを喜ぶ、殆ど遣り場もなき菓子と果物を眼前に積まれて何の效かあるべき、

但し以上は折角の贈り物を食ふ事の出來ざる重き病人なり、既に三週間の全癒を保證されて、加之も始めの一週間に熱を去りし我は、見舞客の雜踏にこそ聊か閉口せしが、その好意と共に喜んで諸方よりの見舞物を受け、むしゃ〳〵と無遠慮の大口を開いて菓子を食ひ、あまり病人のくせに喰ひ過ぎて看護婦に叱られたり、こゝに謹んで諸君の賜物を感謝す、

病中の失策

入院の三日目、家に病みしと共に四十度内外の熱を上下せしこと五日目の朝、殆ど其間は食慾を絶ちて腹はペコ〳〵なれど、俄に大便を催せし時、それと見たる看護婦、直に便器

を持ち來る、我これを退けて曰く、いかに病むも自己の糞を人に取られ自己の尻を人に拭はるべきかと、入らざる勇を鼓してベットを降り、無理に痩我慢の力足を踏んで病室の外に歩み出すや否、ふら〳〵として五體を何物にか振り舞はさるゝが如く、べたりと其處に尻餅を搗いて其まゝ急に起つ能はず、やう〳〵看護婦に助けられて元のベットに身を横たへられ、殘念ながら尻を捲られて便器を當てがはる、人間の氣で持つは健康の時なり、

入院六日目の午後四時ごろ、いまだ横行濶歩は叶はざれど、もはや無事に便所へ通ふの自由あり、廊下傳ひに厠より歸り來れば、看護婦いづれにか出でてあらず、其まゝ我ベットに横臥せし時、見舞客と思ひの外、ひよろ〳〵と衰弱せる病人の音もなく入り來りて、蒼白き顏に窪める眼を光らせ、こゝは私の病室ですと、驚いて番號を見れば三十七號、我は隣りの三十六號なり、もし健康體ならば互に手を拍ツて笑ふべきに、お互の病人お門違ひの滑稽に淋しき笑を浮べ合うて、これは失禮の一言を殘せしまゝ逃げ出せり、加之も勢ひよく急に逃げ出す能はず、そろ〳〵と逃げ出しながら振り返れば、その衰弱病人また急にベットへ上る能はず、よぼ〳〵として漸く這ひ上れる後姿、我よりは頗る哀れに悲慘なり、病むものと病むものとは常に斯の如き比較を以て僅に自ら慰む、我また他より見られて、いかに哀れなりしぞ、

三十七度の熱に下りし八日目の午後、醫者の許しを受けず看護婦にも告げず、竊に病院を脱け出でて俥を飛ばし、銀座の風月堂に洋食を喫し、資生堂にレモンソーダ二杯を飲み、其まゝ再び俥を飛ばして病院に歸るの途上、一友また俥を飛ばすに逢ふ、すれ違ひに叫びて曰く、もはや退院せしかと、その夜その友人の我家を訪うて猶いまだ入院せるに驚き、翌朝、來りて大に諫めし時、母また來りて大に叱り給ふ、どうして此子は斯ういふ亂暴で

せうかと、この子たる我こゝに五十歳、家に三男四女あり、おもはず額に汗す、退院の前二日、夜十時、無聊に堪へずして、寢ながら電燈の下に從容錄を讀む、その一則中、

頌曰 廓然無聖、來機逕庭、得非犯鼻而揮斤、失不回頭而墮甑、寥々冷坐少林、默々全提正令、秋清月轉霜輪、河淡斗垂夜柄、繩々衣鉢付兒孫、從此人天成藥病、

得は鼻を犯さずして斤を揮ひ、失は頭を回さずして甑を墮す、この二句これを平生の机上に見るよりは、さらに無限の興味を覺えて、相手なきまゝ傍らの看護婦に說く、これは莊子の徐無鬼といふ編にある古事で、郢といふ國の或人が鼻の頭へ粟粒ほどの土を塗り著けて匠石といふものに向ひ、この土を斧で削り落して見よというた、そこで匠石は直に大の斧を眞ッ向に振り上げ、その鼻頭の土を削り落したが少しも鼻に傷を付けない、削るものの削らるゝもの、互の氣合が一致せし呼吸の工合、つまり唯佛與佛の以心傳心をいうたので何事も至れる名人同士の業は間髮を容れざるところに、かゝる微妙の技倆を發揮すると、さも面白げに語りしが看護婦さらに面白からざる顏色、こくり〳〵と居睡りを始む、我まゝす〳〵無聊に堪へず、兒戲に似たれど卽座の卽興、試みに唾を以て小さき紙片を鼻の頭に張り付け、萬年筆を匠石の斧に代へて、その紙片を物の美事に跳ね飛ばさんとせしが、過ッてペン先を鼻の穴に突ッ込み、思はずア痛と叫べば、看護婦この聲に目を覺すや否、不意の出血に驚き、藥局より藥を持ち來りて綿に濕し、左の鼻の穴に差込めり、翌日、三男の信彥七歳、書生に伴はれて來り、お父さンお取りなさいよ鼻の穴から綿が出て居ますといふ、

退院

わづかに三週間なれど、籠の鳥の雲井に飛ぶが如し、もし病院を監獄とすれば、刑期こゝに滿ちて放免せらるゝの快いふべからず、

俥を飛ばして病院より根岸の家に歸るの途上、その送らるゝ時に比して、我ながら殆ど別人の如し、

その朝、まづ電話を家に通じて退院の時刻を報ぜしかば、門前に妻子奴婢は迎へ、老いたる母は玄關に出でて我を待ち兼ね給ふ、

豫期の時日に必ず全治すべき病にさへ、家人は驚喜して斯の如きを思へば、ます〳〵疾病の不幸これ自己一人の不幸にあらざるの感深し、さらに一家の主人たるもの健康を保つの責任いよ〳〵重きを知る、

妻

親友數人、相會して雜談の後、細君論に及び、おの〳〵これに對する意見を陳ぶ、

まづ誓うて曰く、他人の說を受賣すべからず、世間體を飾るべからず、わざと高尙めいて氣取るべからず、殊更に學者ぶりて餘計な講釋すべからず、たゞ露骨に無遠慮に忌憚なく思ふまゝの結論を簡單明瞭ありのまゝに告白せよと、

一人曰く、

なるべく妻は大切にすべし、大切にすれば妻また良人を大切にして、誠意の親愛に滿たされたる自然の生理上、その間に生るゝ子女の精神體質ともに健全なるのみならず、

一家の幸福また夫婦の和合より産み出さる、人道上の根本義ともいふべき夫婦間に誠意を缺き親愛を缺けるもの、到底その他に於ても人としての價値あるべき筈なし、

一人曰く、

なるべく嚊アは粗末に取扱ふべし、粗末に取扱はざれば由來この嚊アなるもの、どこまで増長するやも知るべからず、ぐづ〳〵吐すや否、大喝一聲の下、ぎゆうの音も出し得ざるほどの習慣上に飼ひ馴らして置いて、而して後、をり〳〵氣の向いた時、ちよいと可愛がツてやるを上策とす、蓋し嚊アは亭主の飼養次第にて自由自在、どうでもなるものなり、他人にさへ迚も續かぬ人間の誠意敬愛を我手許に飼うた嚊アのため出し切ツて仕舞うて堪るべきや、これを社會に盡し、社會に供して、もし餘りあらば嚊アに分與すべし、それで不足をいへば嚊ア既に亭主への愛も情もない不貞腐れ阿婆なり、結論に曰く、宇宙間の生物原則として妻は良人の犧牲物たるべし、犧牲物が嫌なら良人を持たずして近來流行の獨身生活を營むべし、但し婦人の獨身生活、果して首尾よく遂げ得らるゝや否や、果して人道に叶ふや否や、

一人曰く、

大切も粗末もなし、我女房一人を無爲に化する事の出來ずして、男子そも〳〵競爭激烈の世の中に立たるべきや、始めより我は女房を問題にせず、これを問題にするがため、その問題に解答を與ふべき必要あり、加之も人事の解答なるもの、いかなる場合にも滿足のあるべき筈なく、寧ろ滿足のなきところに人間の意義あり趣味あり、結局女房は當らず觸らず可愛がらず叱らず、靜に其まゝそツとして置くに如かず、これを女房に對し無爲にして化する方法とす、觸らぬ山の神、もし祟らば遠慮なく突き出す

べし、

一人曰く、

すきな熱を吹く諸君は實に羨むべき哉、僕の細君は頗る馬力の猛烈なるものにして、よほど注意せざれば忽ち形勢不穩の兆あり、常に戰々兢々として只これ細君の意を迎ふ、まはかず叩き出せといふものあれど、うか〳〵すれば僕の方が叩き出さるゝ恐れあり、良人としての不幸これより大なるはなく、これを忍ぶは他なし、實は一方ならぬ恩人の娘にして、加之も世間しらずの我まゝに天生の癇癖と強度のヒステリーを加味し、おまけに手の附けられざる女權擴張論者なり、あゝ男子の女子に對する一歩その始めを謹まざるべからず、

一人曰く、

我は妻を翻弄せり、但し尾を見せずして巧みに翻弄するがため、妻は絶えず悅に入り絶えず上機嫌にして、いまだ一度も不足を唱へ不平を鳴らせし事なし、知らぬが佛といへる語、實際これを遺憾なく妻に行へり、妻のみにあらず、我は社會あらゆる方面より我に綜合し來れる我主義として、ずう〳〵しき惡人の多き今日、たとひ僞善たりとも生涯その僞を現はさざれば正に是れ善なりと思へり、かの誠意誠實を口にしながら、一も事に行ひ得ず、たま〳〵行へば却ツて不善の結果を來せる世間の奴等を笑ふ、凡よ世の中に無能の善人ほど取扱ひに困るものなし、この理より我は妻を翻弄せり、妻の喜び妻の嬉しがるやうに翻弄せり、妻の怪しまず、悟らずして有難がるやうに翻弄せり、翻弄せらるゝとさへ氣が付かねば、我妻たるもの亦これ生涯の幸福ならずや、つまり我の妻に對する、善意を以て生涯うまく欺しぬけば足れりとす、

一人曰く、

どういふもンか、拙者は一週間に一度ぐらゐづゝ夫婦喧嘩をせざれば面白からず、あけても暮れてもベチヤ〳〵と倚り添うて交情の好い夫婦、そも〳〵あれに何の趣味あり何の意味ありやと疑ふ、金を出せば花柳の巷いたるところに好きな美人ありて、加之も世辭愛敬の好さ加減は迚も妻の比にあらず、妻たるもの、をり〳〵喧嘩して其まま別れざるところに夫婦の情あり、出て行け出て行きますと喧嘩しながら、出もせず出しもせず、直に忘れて笑ふところに無量の快あり、夫婦喧嘩と兄弟喧嘩とは寧ろ情愛の極なり、夫婦喧嘩で實際に別るゝものは、なほ兄弟喧嘩で生涯を睨み合ふと一般それは例外にして所謂る拙者の夫婦喧嘩にあらず、拙者の夫婦喧嘩は雨後の明月に等しく、さらに一入の趣を生ず、蓋し拙者の夫婦喧嘩は不足不平の鳴らし合ひでなく、るまじき風情で、もし狼狽へた臆病者なれば、狸か狐の化物と見るより外はない、どうしても明智在の片田舎にあるべき筈の美でない、可兒郡の一郡は偖措き、おそらく美濃一國を探し歩いても、名畫の外、生きた人間として、これほどの美人はあるまいと思ふ、その絶世の美が名花一輪の風に吹かれし如く、俄に道を外して路傍の樹蔭へ身を避けた優しげの風情、光秀こゝに十九の青春でなくとも、一種の魔力に襲はれざるを得ない、英雄また斯る時は凡夫、いや反響の鈍い凡夫よりも寧ろ瞬間の印影は深かるべき筈である、もし萬一、我城下に住むものとすれば、たとひ今まで目に見ずとも兼ての取沙汰を耳に聞くべき筈、また可兒郡の一郡中にありとすれば、新領分を喰ひ缺く前まづ此美人が敵の餌食となるべき筈、さては近ごろ他國の空より流れ込みしものかと見るに、ふしぎや旅の姿でもなく、親兄弟も伴はぬ夕暮の野路に只一人、いよ〳〵不審の念に堪へない、ます〳〵

訝しく思へば思ふほど、その美が深く胸に刻まれて、行き過ぎながら我しらず幾度か振り返ッたが、すぐ其場に目尻を下げて、幸ひ召し連れた一僕の耳へ彼女を取持てとか、また彼女の宿を見届けて來いとかいふ、生いやらしい太平の世の若殿様でない、しかし此美人は尋常一様の美といふ美でない、今この戰國に生れて一日の油斷も出來ない稲葉山の敵をうけし明智城の主人、その十兵衛光秀さへ其まゝに忘れ得ざるほどの印影を與へた美人、所謂これが眞に絶世の美なるものである、のみならず、この美人には光秀をして美の外に捨て得ざるだけの氏素性を持ッた美人である、また齋藤家のために踏み潰された落城の曉手を引いて諸國の艱難辛苦に伴うた妻も、この美人である、他日の惟任日向守に人しれぬ内助の功の多かッた夫人も、この美人である、つまり明智光秀は天下後世に誤り傳へられた大不運の人であるが、妻に對する良人としては天下の古今、只一人の幸運兒である、

身を作り美を保ち得べし、吾人は常に此主義を以て妻に對す、自己の妻を煤だらけにして置いて他の紅粉を追ふもの、妻の賊なり、

一人曰く、

我は妻を論せず、妻を論ずれば、のろけに當る、諸君の前、甚だ失禮なり、たゞ一言これを語れば、妻の我に於ける殆ど正體を失ひ、目も鼻もなく、惚れぬいて、めちやくなり、

一人曰く、

今更ら彼是いうて始まるべきや、實は多少の不足あれど、その不足他人の知ッた事にあらず、これを世間に持ち出して何の效かある、妻また我に向うて多少の不足あるべく、その不足と不滿を堪忍し含うて兎も角こゝに夫婦一對の無事を保てり、この他

に文句なし、

一人曰く、

妻は良人の情慾を滿たすべき器具とし、また種族保存のため子を産むべき器械とす、その代價として我は妻を養へり、比較的、他よりも安價なるがため或程度までの要求を許して出來得る範圍内に養へり、老いて用をなさざるに至るも、昔日の勤務に酬いて老後を安くせしむるのみ、世間これを人情的より善意に解すれば愛となり、もし惡意に解して種々の攻擊を加ふるとも我に何等の痛痒なし、

一人曰く、

いろ〳〵の事情ありて、實は目下離緣の談判中、我に妻あるが如く妻なきが如く、これに對する言論の自由なし、

わづかに數人相會してすら、妻に對する意見の個々に異なれる斯の如し、もし數十人相會すれば、數十人の議論また更に多かるべし、古今東西この夫婦間にゴタ〳〵の絶えざるもの、故ありといふべし、

辻占

占卜の我國に於けるは、神の御心を問ひ奉れる布斗麻邇にして、小牡鹿の肩の骨を打拔きこれを天之波々迦の木の皮に灼き、その裂の形狀によりて吉凶を判ぜり、天之波々迦は今日の犬櫻にして、卽ち我太古の占は鹿卜なりしが、後に龜の甲を灼いて占ひしがため龜卜となり、神龜の文字ここに生じ、龜裂の語ます〳〵當を得、縱横の文その裂の入りしところを兆といふ、いはゆる禍福の前兆なり、

連山、歸藏、周易の講釋は易學の大家よりも寧ろ大に洒落れて算木筮竹、賣卜先生に讓り我は鹿卜龜卜より來れる我國の種々なる占に頗る興味深く、就中、橋占と辻占を最も面白く感ぜり、

錢占、神前に賽錢を投げ其表裏を以て吉凶を判斷するもの、織田信長の桶狹間に今川義元を破るや、この錢占を用ひ、まづ熱田の宮に詣でて曰く、もし我軍に利あらば表を示し給へと、十數錢を投ぜしに悉く表面を現はせり、將士勇躍、いづれも必勝を期して起つ、實は二枚の錢を表面のみ合せし信長の手品にして、神前の賽錢これを手に取るものなく、加之も敵は眼前に迫れる危急の際、英雄この錢占を最も偉大に活用せり、

石占、石占は錢占より古く行はれ、神の祠に丸き石を置いて石に靈異ありとし、これを石神と稱し、その石を持つに重き時と輕き時によりて吉凶を占ふもの、萬葉集にも「石占もちて」とあり、古歌に「あふことはとふ石神のつれなさに我こゝろのみ動ぎぬるかな」また戀歌にも用ひらる、「ゆふけとふ石トもちていふことのかたき戀とは思ひ知りにき」されど實際は石の輕重よりも其人の心理狀態にありて、これを重しとせる自己催眠にかゝれる時は重かるべく、また輕しとせる時は輕かるべし、もし今日の横綱力士これを持てば石占にあらず石ころなり、

歌占、歌占は歌集を開きて、第一に出でし和歌の上の句、下の句、若くは全一首を考へ、その意味より吉凶を占ふもの、

灰占、灰占は「おもひ人身にしみ〳〵と待ちこがれ枕香爐の灰占をとふ」この古歌により て知るべし、

疊算、疊算は婦女子その笄を投げて疊の目を數へ、奇數を吉とし偶數を凶とせるもの、古

これを釵卜と稱せり、「釵卜無憑芳信杳」今は多く花柳の巷に用ひられ、釵なき時は煙管を用ひ火箸を用ひ、ハイカラは指環を拔いて轉がし、無作法千萬な女は、食ひかけた豆を其まゝ吐き出して豆算を行ふ、

その他の我國風に傳へ來りし占卜の方法、あげて數ふべからざるも、古來なほ今日も興味あるものは橋占と辻占なり、

今は電車のため其古跡を失へど、我いまだ幼少の頃、鄕里の泉州堺に晴明が辻といへる四辻あり、古昔、安倍晴明こゝにありて道行く人の心なき言葉を取り、これを占卜の用に供せしがため辻占といふ、「經莫戸塞ゆふけの神に物とはむ道行く人よ占まさに告げ」また京都の堀川、一條戻橋も安倍晴明が十二神將を橋下に咒伏して、その口より禍福を報ぜしめしがため、橋占と稱せし傳來あり、「おもひかね占どふ橋よ正しかれ世の人ごとをたのみわたらむ」

蓋し辻も橋も人の往來の繁きところにして、言靈乃八十街夕占問といへるもの、これなり漢字には響卜と書し衢卜と書す、讀んで字の如く、辻占、橋占、いづれも同一の理より生ぜり、

昔、辻占の法は、夕暮より市の巷の四辻に出でて物蔭に隱れ、都宣の櫛を把ツて道祖神を念じ、その辻に來れる三人自の言葉を聽く、もし三人目に言葉なければ、その次の言葉を聽き、これを我身の善惡吉凶に占ふ、都宣は黃楊の木にて、いはゆる黃楊の小櫛なり「さし櫛もつげの齒なくて吾妹手がゆふげの占を問ひぞわづらふ」黃楊は告げに通ず、我に正しく禍福を告げよとの意なり、辻占また櫛占ともいふ、さらに後世この辻占を口占と稱し「吹く風の口占で知れ今朝の秋」俗に人の口占を引くといふ、

この辻占は幾變遷して、瓢箪山の辻占となり、淡路しま通ふ千鳥の戀の辻占となり、辻占煎餅となり、辻占豆となり、乞食半分の辻占賣となるに至る、

河内の瓢箪山、今日なほ辻占の古風ありて、京阪人の何事をか占はんとするもの、夜をこめて橋の下に潜み、人事一切の禍福去就を定むるもの多し、

我は常に思ふ、人間は迷ひの動物にして、いかに悟れりといふも迷ひの範圍を脱せず、たゞ迷ひの程度に深浅あるのみ、一面また運命の謎を解かんとする動物にして、いかに解けたりといふも、また深浅あるのみ、一歩の前途、一瞬の將來、誰か神明の如くに知るべき、わづかに經驗より來れる知識と過去の推理と修養の誇りに杖ついて歩めり、

道に迷ふ時、杖を立てゝ倒れたる方角に向ふの例あるは、いはゆる運を天に任せるものにして、最善の方法を講じ人力を盡せし後、なほ及ばざる時これを自然の天に問ふ、人間一種の安心術なり、

我この理に於て愚夫愚婦の占卜を笑ふ能はず、たとひ迷信にもせよ自己の信念を以て神佛の籤を取るが如き、彼等は彼等の程度に應して安心を得むとし、到底その智力の及ばざるところを問へり、

我また高尚幽玄めいたる易學の理窟詰よりも、寧ろ無意味なる辻占法に於て一種の趣味を有し、一夕、これを銀座街頭の交叉點に試み、電車待合の人混に耳を傾けり、我その時の迷ひは、既に夕飯を濟ませしが、何となく腹加減に食ひ足らぬ心地して、この上また洋食を詰め込む可否如何にあり、

たま〳〵職人體の四十男、手を引ける八九歳の小兒を叱り飛ばして、

この野郎、たッた今、夕飯を食ッたばかりぢやアねェか、そンな無理をいふと今度か

ら連れて來ねエぞ、

これは恐縮、いかにも其通りと洋食を差控へ、ふと思ひ付きし第二の問題は、この近處の友人を訪ふか訪ふまじきかにあり、

折しも藝妓らしき女二人、聲を潜めて、

お止しよ、往ツたツて無效さ、今時分おとなしく家に居る人かね、

だツて折角こゝまで來た序だから、無駄と思ツて、ちよいと附き合ツて貰へないの、

無駄と思ツたら猶更お止し、第一また、此方から足を運ぶと弱くなるよ、

どうせ彼情人には、强くなれないもの、

あらまア、こゝは往來だよ、

往來の立のろけを聞かされて、友人訪問また中止、あらためて第三は我ために聊か近來の難問題、ある知己の事業失敗その善後策を頼まれしが、いはゆる蜂の巣を突き破りし如く殆ど手の著けようなきも多年の親友これを見殺しにする能はず、實は苦心慘憺の折柄、この辻占を問へば、

若き娘三四人、ひそ〳〵私語きしに、その中の一人、だしぬけの大聲、

あら、隨分だわ、

つゞいて一人また笑ひながら、

よくツてよ、

また一人、

いけないよウ、

こゝに於て我ます〳〵面くらはざるを得ず、あら隨分だわの意味、既に了併に苦しむ　よ

くッてよ、この一言は親友のため大に進んで力を盡す氣になれど、いけないよウ、この一言は到底その效なきを告げ、また或は今よりも却ッて困難の增す恐れあるを豫言するに似たり、進退いづれにせんと思ふ一刹那、

どうでも勝手におし、

この一言に、ぎやふんと參りて、我ながら馬鹿々々しさに堪へず、其まゝ立去らんとすれば、

おい待て、

はッと振り返れば、滿員の電車に乘らんとする友達を後より呼び止める聲、我の事にはあらず、ます〳〵馬鹿げて、ぶら〳〵と歩み出し、京橋を渡らんとする時、すれ違ひに二人の男、

あン畜生、ふざけて居やアがるぜ、

全くだ、

始めて我こゝに釋然たり、いやしくも人間の禍福吉凶を知らんとするは、人間の力を盡せし最後の極たるべきに、洋食を食ふか食はざるかの如きは、いかにも誠意なく信念なくして、ふざけたる我なり、既に第一歩を出損うたる以上、もはや親友のために謀るも何物のためにするも、感應のあるべき理なく、勝手におしといはるゝ筈なり、ふざけるなとの一言、只この辻占のみ橋占を兼ねて正に當れり、

感　情

感情の衝突、その根を洗へば十中の八九、つまらない事より起りて、とンでもない意外の

大事に及ぶ、國は戰爭より人は殺傷に至るまで、多くは感情の衝突に基せり、

我いまだ二十七歳の時、親友某の家を訪ひしに、他の先客ありて、我その書齋に待つこと久し、たま〳〵一疋の猫、來りて我膝に乘れり、

蓋し某は夫婦の間に子なく、有名の猫好きにして、朝夕愛撫の極、寧ろ猫狂氣の部に入れるのみならず、その猫は世に珍らしき銀目の三毛と稱するもの、わざ〳〵廣島の親戚まで出掛けて奪ふが如く無理に貰ひし自慢の猫なり

されど我には金目も銀目も何の趣味なく、三毛四毛さらに珍ならず、戯れに首筋を捕へて膝の上に押し付け、三四本その口髭を引き拔けば、にやンと啼くべき奴、ぎやアと啼いて手を搔き拐りながら遁げ去れり、

數日の後、また某を訪ひし時、その傍に例の猫あり、我を見るや否、俄に四足を突き立て背を高く丸め、恨むが如く恐るゝが如く、ふう〳〵吹いて忽ち去りしを我おもはず笑ひ出せば、某また思はず目を怒らして、はゝア愛猫の髭を拐ツたのは君だな、

僕だよ、はゝゝと笑へば、某ます〳〵怒りて、けしからン、言語道斷だ、君のやうな人間は今後また何をするか知れない、大に警戒を要する、油斷のならない男だ、おい君、笑ツて濟むかと、殆ど別人の如き勢ひに我また承知せず、この馬鹿者め、猫の髭を三本や四本何だ、それほど大事の猫なら金庫の中へでも仕舞ツて置け、一疋の畜生、うか〳〵すると今度は捻り殺されるぞ、

いはゆる賣言葉に買言葉の結果、多年の親友は猫の口髭三本のため竟に絶交せり、

今より見れば、實に愚もまた甚だしき愚の極を演じて、殆ど滑稽に類すれど、當時その場の勢ひ互に相讓らずして面を赧め合ひしが、翌月、ふしぎに例の猫は死せり、口髭三本のた

め死せるにはあらざるべきも、その翌月に死せしがため、猫狂人ます〳〵常識を失うて、仇敵の如く我を恨むに至る、

我その死を聞くや、さらに入らざる惡戯を以て寧ろ快とし、殊更に死猫の畫を描いて送りこれに宏智禪師の頌語を添へて曰く、

卒客無卒主、宜假不宜眞、羞珍異寶、用不著、死猫兒頭、捻出看、

某いよ〳〵怒り、我いよ〳〵笑ひ、雙方の感情ます〳〵衝突す、

その後また猫の子を貰ひしと聞き、我また端書一枚の表に書して曰く、

口髯御用心

某の憤怒、もはや堪ふる能はず、俥を飛ばして我を襲ひ來るの前、某の書生その事あらんを恐れ、竊に人をして我に急報せしめ我を避けしむ、

我これを聞くや、また俥を飛ばして出づ、出づる時、我書生に命じて云はしむ、今度は猫の口髯にあらず、いよ〳〵捻り殺しに出掛けたと、

時を考へ道を違へ、我は他の友人を訪うて談笑せしが、某の我家に達して、捻り殺しに逆襲せりと聞くや否、周章狼狽、驚いて其まゝ引ツ返せり、

後日、我に向うて云ふ、實際あの時は一ぱい食はされたよ、外の者は兎も角、相手が君だからねエと、當時の我は全く猫の子を捻り殺すものと思はれたり、

衝突絶交のまゝ凡そ半歲餘、その年の冬、他の友人より我を難じて曰く、猫の口髯三本を以て多年の親友こゝに絶交せるは、あまりの兒戯に類して殆ど仲裁の價値なし、只その後に於ける君の態度は頗る意地の惡き挑戰的にして、徹頭徹尾、悉く君に罪あり、宜しく謝罪すべしと、

實は我の豫期せしところ、直に訪うて罪を謝せば、某また今更ら白己の穉氣を顧み、互に笑うて交友さらに再び舊の如し、

されど其後は我の訪へる時、夫婦相戒めて、いまだ一度も猫を見せしめず、にやア〳〵と啼く聲の聞ゆる毎に、某も我も等しく苦笑せるのみ、

蛙

蛙の子は蛙になるといへる諺あり、

蛙の子、いかにも卵化せし當時の形狀、さらに蛙の子とは見えず、所謂お玉杓子にして、まツ黑に小さく丸く尾を振りて、うよ〳〵と水中に泳げるところは、寧ろ鯰の子かと思へど、漸く成長するに從ひ漸く變化し來り、まづ二本の後脚を生じ、次に二本の前脚を生じ尾は次第に短縮して次第に水を離れ、竟に本來の面目たる蛙の子となるに至る、されど蛙の子は進化して間違ひなく親に肖たり、人間の子は成長して間違ひ易く親に劣れる不肖の子多し、

蛙の子は蛙になるの諺、うか〳〵これを人間の冷笑罵倒に用ふれば、却ツて蛙に一本まゐらるべし、親の子として親に肖たのが不思議かと、

蓋し蛙は水陸兩棲の動物にして、昆蟲その他の小蟲を餌とす、これを餌とするに最も吸引力ある大息と共に最も粘著力ある長き舌を以て、ぺろりと嘗め取るや否、電光石火その舌を忽ち反轉して口中に收む、前脚よりも後脚は長くして水を泳ぐに便なるのみならず、また屈伸自由に力强きがため陸上の飛躍にも便なり、その啼くは雄なり、眼の後下部なる叫囊に空氣を出入せしめて聲を發す、春の末より夏を我世界として盛に活動し、秋の末よ

り冬に至りて土中に入るや、其まゝ一寸も動かず一物も食せず、殆ど呼吸なきが如く死せるが如くなりて、また再び春の來るを待つ、これを冬眠といふ、

今日の生活難に追はれて、最も冬に苦しみ、年の暮の大晦日に轉手古舞の人間、いかに羨ましきぞ、冬眠どころか半日の晝寢も出來ずして騷ぎ廻れり、

俗にいふ蝦蟇は、背に縞ありて草間に蟠居し、居ながら蚯蚓を常食として叩りに出でず啼かず、また他の同種類と交際せず、頗る傲慢にして系統の正しきを誇れるが如し、

俗にいふ雨蛙は青綠色にして、最も詩的の趣味に富み、形狀また憎からず、梅雨の候、樹上にありて枝より枝を渡り、をり〳〵青葉の蔭に憩うて食を求め、將に雨降らんとするや、さも自己の聲を自慢らしく啼き始む、動もすれば座敷に飛び込み來り、これを机上に放ち掌上に弄するも、寧ろ優美にして愛すべく、殆ど蛙族中の貴公子めいたるところあり、

土蛙、これは頗る下品にして、加之も無作法に密集し不規律に群居し、多く水田に棲む、その土に同化されて土色を帶びたるがため名に呼べり、啼く聲また蠻音にして、ぎやアぎやアと人の耳を聾す、いはゆる蛙合戰なるもの、この土蛙の食ひ合をいふ、原因は知るべからざるも、全然これ百姓一揆に似たり、

赤蛙は褐色を帶びて山野に棲み、その不幸は蛇に覘はるゝのみならず、小兒五疳の妙藥として人間にも覘はる、前門の狼、後門の虎、實に憫れむべき哉、絶えず兩攻に逢うて、ぴよい〳〵と遁げ廻れり、

蟾蛙、我これを蛙族中の英雄とす、その形狀の他よりも偉大にして小事に拘泥せざる、その態度の更に悠々として物に驚かざる、夏の夕暮、のそり〳〵と出でて四方を睨み廻し、人これに近づくも敢て恐れず、これを追へども容易に去らず屈せざる面魂、頗る大膽不敵

の風あり、試みに捉へて頑上を灸すれば、熱きに堪へざる始め三四度、前脚を擧げて艾の火を掃はんとするも、その届かざるを知るや、度胸を据ゑて觀念し、兩手を地に擴げて天を仰ぎながら、泰然自若として少しも動かず、漸く火の消えし後、また悠々たる態度、のそり〳〵と去る、たとひ身は燒かるゝとも、及ばざるを知れば再び無用の愚を演せざるところ、殆ど大悟徹底の禪三昧に入りて、ますます〳〵英雄の價値を增せるが如し、

凡そ蛙の種族にして蛇を恐れるものなく、蛇に食はれざるものなし、只この蟾蜍のみは寧ろ蛇をして恐怖せしめ、蟾蜍の大なるものを田父と稱す、田父これを俗にへびくひがへるといふ、蛇を見れば忽ち逆襲して一擊の下に畏縮せしめ、その尾を銜むに蛇は動く能はずして死す、死狀の奇なる、尾より四五寸の間、少しも皮を損せず其まゝ依然たれど血も肉もなし、蓋し平生に於ける蛙類一切の仇は此英雄によりて報ぜらる、

寄附

寄附の文字は近來の成語なるが如し、

寄附の語、これを昔の熟語に求むれば、寄進、喜捨、奉加、知識の類にして、多くは宗教上に關し、乃ち神社佛閣の建立その他に於ける時、いはゆる善男善女の信者いづれも爭うて我より進み、自己の分に應ぜる金品土地等を捧げ、これを神社佛閣の募る方よりいへば勸化と稱し勸進と稱し或は募緣といふ、

寄進は志を寄せて進獻するの意、喜捨は喜んで淨財を捨つるの意、奉加は施入の力を加へ奉るの意。知識は互に知り識れる間の友を誘ひ合はせ貢ぐの意にして、勸化、勸進、いづれも善法に勸め正法に化するの意、募緣は緣ある衆生を募るの意なり、募緣また慕緣と

書す、

今日の寄附とは同情を寄せて金品を附與する意味なれど、今日に於ける實際は、同情を强ひられて金品を掠奪せらるゝが如き點あり、

寄附金募集の下には必ず慈善と稱し博愛と稱し、その名の美なるに於ては一の間然するところなきも、その實に於ては頗る怪しきもの多し、加之も我より進んで寄附すべき喜捨奉加の性質を、寧ろ相手より無遠慮に進み來りて無理往生に押し詰められ、いや〳〵ながら寄附するにあらず寄附させらるゝこと多し、

たま〳〵我より進んで寄附するものは、多く賣名の徒にして、これを一種の廣告に用ひ、その廣告によりて寄附金よりも更に大なる幾層倍の利を得んとす、募るもの應ずるもの、いづれも互に負けず劣らず利用の仕合なり、或意味に於ては寧ろ惡用の太刀打なり、

慈善屋、博愛屋、これに關する寄附金の募集屋、あまり多きに過ぎて、常識恒産の階級に屬するもの、これがため日として惱まされざるなし、

夜更け人定まりて後、竊に忍び入りて竊に物を盗み去るもの、これを盗賊と稱し、捕へられて監獄に叩き込まる、

青天白日の下、公然と玄關より入り來りて種々の印刷物を押し擴げ、あらゆる善美の語を聯ねて金品を攫得し去るもの、これを寄附金募集と稱し、袋叩きにも逢はずして天下に横行す、

不良の遊民、いはゆる破戸漢なるもの、自己の繩張とせるところに手拭の類を配りて金錢を强請せし惡弊は、今日その影を次第に潜めたれど、慈善博愛の下に一種の威喝を行ふもの、却ツて次第に增加し來り、いたるところ、繩張もなく際限もなく、塵紙一枚も置かず

して自由自在に金錢を取り歩けり、

一面また慈善も博愛も殆ど賣買物となれる今日、玉石混合の結果として、眞の慈善事業と眞の博愛事業とに禍せる影響、それ幾何ぞや、

悪名の下に悪をなすものよりは、美名の下に悪をなすもの、最も憎むべし、さらに博愛慈善の假面を被りて眞正の博愛慈善を害するの徒、これを社會の制裁上に殺さざるべからず殺すの方法、監督廳の嚴密なる調査これを許可せざると、新聞紙上の假借せざる筆誅これを撲滅するにあり、

旅行記

我いまだ家をなさゞる時、年少氣鋭、四方に飛び廻りて足跡は殆ど全國に普く、たゞ北海道の一部を殘せるのみ、されど今日これを回顧すれば、旅行にあらずして蠻行なり、砂漠の民が水草を逐うて轉々するよりも、なほ無意味なる一種の旅行病なり、いたるところ具さに艱苦を嘗めしが、その艱苦また多くは何の效なく、結局は全然これ無爲の漂流にして漂流の痕跡、今は夢の如し、

家を成せし後の二十餘年、また年として旅行せざる年なきも、その旅行は寧ろ娯樂的の旅行にして、旅行せざるべからざる必要の旅行は十中の三四、多くは山水花月の遊のみ、これを心身保養のためとすれば、多少の得るところあれど、實は猶いまだ已まざる旅行癖の旅行たるを免れず、

曾て大阪の某新聞に世界漫遊を募りし時、我これに應じて行かんとせしが、たま〳〵所用ありて果さず、已むなく鄉友大澤某に讓りて代らしむ、百聞一見に加かざる點は惜しむべ

きも、團隊旅行の日割と時間割とに引き廻さるゝ赤毛布連たるは、我感興を殺ぐこと尠からざるも、また中止の一原因たり、

旅は道伴といへど、我は常に我意の向ふところ我心のまゝなる單獨旅行を以て最も快なりとす、さらに通行的の廣く淺きよりも自由滯留の深く狹きを以て最も趣味ありとす、然らざれば寧ろ繁忙中の閑を偷みて、わづかに一日、若くは半日の探勝また却ツて無量の興味津々たるを得べし、

加之も我に未だ曾て旅行記なるものなし、

凡そ文士として旅行の多き割合に一の旅行記なきもの、まづ我以外にあらざるべし、旅行記を作らんがための旅行者たるもの多きを笑ふにあらず、實際に於て我は旅行に忠實なれど旅行記に無精なるが故なり、

もし我に旅行めいたる記事ありとすれば、曾て豐太閤を著はせる時、その序文に一片の消息を漏らせしのみ、

春秋いづれか一年一度は必ず京阪の地に遊ぶ、されど花に月に掩留いまだ二旬を越えざりしが、去年は故ありて殆ど半歳を絶えず大阪と京都の間に往來し、往來する毎に伏見の亭を宿とす、亭は豐後橋の畔にありて、桃山の下、宇治川の涯、松原山を望み江雪堀を顧み、指月を負ひ、向島に對し、淀に近く八幡に遠からず、道また洛東の大佛と阿彌陀が峯に通ぜり、滿目の風物、一片の木石、皆これ歴史の語るところなれど千古の英雄こゝに去ツて當時の覇業いづくにある、夜は深く人は定まりて後、たゞ枕に中書島の絃歌を聽くのみ、人生讀書子となる勿れ、いたるところ俯仰感慨の多きに堪へず、たま〳〵半歳の筆を抛ちて來りしもの、また筆を執ツて豐太閤の睡れる地に

二十七日間の著者となれり、

これ以外いまだ我の旅行に關せし文字なし、

一日、我を訪へる親友三人、いかにも不思議がりて云ふ、君ほど旅行好きの男にして多年いまだ一の旅行記なきは、いたるところ山靈水伯に對して寧ろ無禮なり、まして身は文士にあらずやと、

こゝに於て我また一片の旅行記を作る、

旅行といへど、實は當時の我日記に等しきもの、加之も殊更ら遠きに及ばず、その地を近く京阪の間に限り、時は豐太閤の序文にある去年の半歳なり、もし題を掲ぐれば、京阪日記と稱すべきか、

京阪日記

明治四十三年の春、大阪の天滿橋より京都の五條橋に至るまでの間、始めて電車を開通し、これを京阪電氣鐵道株式會社といふ、資本金に於ても始ど日本全國の冠たり、

開通の當時は京阪人のため最も便利なる交通機關として、頗る多大の歡迎を受けしが、運轉以後、豫期に反せしこと多く、新聞紙上また攻擊の材料となりて、俄に乘客の數を減じ甚だしきは世間の經濟眼よりも寧ろ乘客その身の危險を恐るゝに至る、當時これを冷罵するものゝ曰吻に曰く、もし身體が二個あれば京阪電車に乘るべしと、

その年の三月、社長を兼ねし專務取締の桑原政、急遽上京して我を訪ひ、內外一切の事情を打明け、謀るに京阪電車の繁榮策を以てす、我まづ云ふ、汽車以外に於ける京阪の間

は由來これを幾度も往來せしが、あらためて具さに沿道を觀察せんと、桑原政は水戸の産、藤田東湖の甥にして、舊虎の門の工部大學より出でしが、いやしくも名ある侍の子が大工の業を習へるは言語道斷なりとて、鄕黨親戚の罵倒に逢ひしといふ…種滑稽の舊時代に大阪へ飛び出し、多年の鑛山技術を以て竟に關西有數の紳士となれり、我に長ずること九年、朋友としては最も面白き朋友の一に數ふ、

三月十五日、東京を發し、半歲の京阪旅行記こゝに始まる、

大阪の天滿と京都の五條とは、その間の汽車も電車も一時間に足らざれど、我この沿道に五日を費せり、桑原政と約せる觀察上の意見を除いて、たゞ單に名所舊跡の旅日記とすれば、

十七日、午前七時、まづ京阪電車の起點たる天滿橋を渡る、明治十八年の大洪水に流失せしを、三年の歲月と十三萬六千餘圓の工費を以て竣工せしもの、長さ百十六間餘、幅六間難波天神の二橋を合はして大阪の三大橋とす、

大阪に於ける天滿は、大阪に於ける年中行事の隨一にして、常に絶えざる靑物市場の盛なるよりも、夏の天滿祭を以て大阪人の誇りとし、これがために市民の熱狂せる華奢全盛は京都の祇園祭と爭ふ、加之も大阪人の天滿宮を信ずること、始ど他國人の豫想以外にあり、他國には只これ大阪天滿の中央でといふ野卑の俗謠を以て聞ゆるのみ、

天滿橋の次の驛を京橋とす、その名の起りし京都よりの要路に當りて昔日の往來繁華を想ふべく、東に遠く信貴、生駒、金剛、千早の連山を望み、近く眼前に魏然たる大阪城の白堊を仰ぐ、當年覇業の雄姿遺跡その半を見るべからざるも、外廓の偉大壯觀は今なほ歷として、懷古の情うたゝ人の腸を斷つ、

この京橋の架せるところは網島にして、巣林子の所謂る天の網島なり、みじか夜や光明遍照お城から、この句また網島の世人に知らるゝ一助とす、寛文年間までは淀川漁民の網干場たるを以て其名ありしといふ、西南は市街の塵烟を避けて流れに臨み、花晨月夕の景物と共に京阪上下の櫓聲を枕頭に聽くの風流地、今日の大阪この網島の外になし、

さらに風流の網島よりも、世に名高きは大長寺にして、南無あみ島の大長寺といへば、直に小春治兵衛を思ふ、この大長寺は先年死亡せし藤田某といへる富豪のため、阿彌陀如來の光りを金の光りに買ひ潰されて、今は網島停車場の傍らに縮小せられ、わづかに荒廢を免るゝのみ、從うて一代の文豪に謳はれたる小春治兵衛の比翼塚も、香煙次第に薄く、弔ふもの漸く稀なり、

小春は大阪曾根崎新地の一遊女、治兵衛は堺筋に住める紙屋の一商人にして、加之も妻子ある身を顧みず、寛保五年十月十四日の夜、この網島に牒し合はせ、折しも大長寺に法座ありしを幸ひ、囘向の群衆に紛れて夜の深きを待ち、やがて人の散ぜし後、寺の背門なる籔影の流れに添ひ、その樋の口の傍らに短刀を以て情死せるもの、いはゆる癡情の結果にして、さらに何等の同情すべき點なけれど、一たび巣林子の文に入れば、千古情事の詩的となりて美化せらる、網島の地、たとひ消滅する事ありとも、天の網島は長く世に亡びざるべし、大長寺、いかに富豪の金力に縮小せらるゝとも、文豪の筆力ます〳〵その權威を加ふべし、

櫻の宮、泉布館、森の宮、豐津稲荷、大阪陣の古戰場として名高き眞田山より鳴野に至るの間、法皇山の稱ありし母恩寺、乃至また大化年來の口碑に殘りし鶯塚、天文年間に聞えし榎並の舊塞等、以上、いづれも大阪近郊の春花秋月に富めり、就中、聊か滑稽趣味を帶

びて數百年の今日なほ面白きは鵺塚なり、また最も人口に膾炙せる古歌の舊跡は長柄の橋趾なり、

鵺塚は江町の東方五町餘、畫なほ闇くして鬱蒼たる楠の下にあり、源三位頼政これを紫宸殿の庭上に射殺せし後、洛中洛外を引き廻して淀川に流せしを、土人この地に埋めて一基の塚を築きしといふ、されど元來の本尊が鵺なり、詮議のかぎりにあらず、寧ろ半信半疑の名所舊跡に勝るの興味を以て見るべし、

古來我國の名橋中、津の國の長柄の橋といへば、千年の詩歌に傳へられて、長柄の人柱といへる諺また世に久しく知らる、人柱の口碑にいふ、昔この橋杭を代へし時、その頃の風習として河伯の犧牲とすべきものを求めしに、たまゝ〳〵辯才の男あり、これを爭ひしがため、却ツて罪せられ、竟に生きながら橋杭の下に埋めらる、その女その後に長じて河内の國の山田村なる長者の許に嫁せしが、母は戒めて云ふ、汝の父は辯才を好みて竟に人柱となれり、たとひ嫁ぐも口を開くべからずと、長者の家に行きて物いはざること月餘、いづれも啞なりとし、夫また去らむとして遠く野に送り出せし時、たまゝ〳〵雉子の啼く音を聞いて矢を放ちしものあり、女これを見て悲しみ、

ものいはじ父は長柄の人ばしら
　雉子も鳴かずば射られまじものを

歌を詠じて泣き伏せしに、夫これを憐れみ、其まゝ再び伴ひ歸りて生涯を深く契りしといふ、あまり饒舌り過ぎて旦那殿に飽かるゝ今日の細君連は、是非とも一度この舊跡を弔はざるべからず、

京橋以後、野田橋、蒲生、野江、森小路を經て守口に至る、守口町は大阪より東北に去る

こと二里、淀川に添へる沿岸中、牧方に次ぐの地なり、守口御坊の甍高く中央に聳え、明治元年、先帝陛下、大阪行幸の際、行在所と共に三種の神器を奉安せしところ、その難宗寺も盛泉寺も今なほ舊狀を現存せり、名物に守口大根の名は久しく、町は半農半商にして風景は寧ろ野外より遠く望むに畫圖の趣あり、

守口に近く中島と新庄の兩村に跨り、大宇江口に至りて淀川の支流を神崎川といふ、いはゆる江口の遊女ありし舊跡にして、古は難波津の入江に當り、西海よりの船舶こゝに幅輳して、京に上るの旅客、いづれも川舟に乘り移りしがため、海口と河口の送迎に日夜の殷賑を極め、遊女の脂粉嬌音と相應じて、我國に有數の大都會たりし當時の繁華を想ふべし、たゞ今日に古の餘波を傳へたるもの、江口の君堂あるのみ、

江口の君とは其ころ世に聞えたる遊女の妙にして、この妙の像を堂に祭り寶林山普賢院といふ、西行法師が江口の里を過ぎし時、その名を知り戯れに一夜の宿を求めしが、すげなく拒まれて、

世の中をいとふまでこそ難からめ
かりの宿りを惜しむ君かな

突然この一首を口門より詠ぜしに、その聲の終ると等しく妙は内より直に返歌して、

世をいとふ人とし聞けば假の宿に
心とむなと思ふばかりぞ

一代の歌人を以て任ぜし西行も、おもはず舌を卷いて驚歎せりといふ、その妙の君堂また春秋幾星霜の今日、空しく風雨に荒れ殘りて、あはれ村童の溺に汚さる、

守口より古川橋、萱島、寢屋川に至るまでの間、その近くに楠氏一族の古戰場たる飯盛山

の城趾あり四條畷あり、正行以下二十餘人の靈を合祀せる四條神社あり、名匠春日の作を以て聞えし龍尾寺あり、秋霜紅葉を以て聞えし清瀧の勝あり、さらに野崎觀音は寢屋川を傳ひ水陸喧嘩の野崎參りを以て聞ゆるのみならず、地勢寺院これを印度波羅奈國大悲の聖蹟を模せりといふよりも、世間は寧ろ淨璃瑠お染久松の野崎を以て名高し、戲曲の力また大なる哉、

寢屋川の次を香里遊園とす、我の半歲を京阪間に費せし旅日記は、實に其半歲この香里園にあり、別に一文を草して後に掲ぐ、

香里の次に牧方あり、牧方は昔も今も京阪間第一の都邑にして、近く維新前までは、關西諸侯の本陣とせられ、その水路よりは所謂る三十石の出入に、くらはんか船の名物は天下これを知らざるものなく、多情の旅客また一夜の春を買ふに娼家軒を並べて、舟を止めるに碇は入らぬ三味や太鼓で舟とめると唄ひし俗謠は、淀川を上り下りの櫓拍子に水亭の燈影を仰ぎし當時の情致を穿ち得たり、今日また郡役所あり町役場あり警察署あり區裁判所あり郵便局あり銀行會社の支店等ありて、新開地の遊廓を櫻新地といふ、大阪より京都に至るの間、新に遊廓を設けし一事は、以て他を知るに足る、

牧方の一端に天の川あり、淀川に注ぐべき水淺くして舟筏を通ぜざれど、古歌の名所として世に聞え、その架せるを鵲橋といふ、これやこの空にはあらぬ天の川といへるもの、これなり、七夕の星合を意味して天の川といふに趣味あれど現在その地の人は殊更に天の川と呼ぶ、あたら鵲橋の名も用なしと笑へば、いや橋は後に架けしもの、むかし天人この川に降りて水を浴びしがため天の川なりと、天人丸裸の川行水、あまりに殺風景を極めたりといふべし、名所の風韻は往々かゝる徒に誤らる、

鵲の橋を渡りて約四丁、山田村に百濟王の神社あり、推古天皇の朝、百濟より歸化せし阿佐太子、佛像經典を聖德太子に獻じ、その功によりて此地を賜ひしが、聖武天皇の朝、博士王仁の文教に貢獻せし功を併せ、儒佛二道の祖として祭らる、さらに惟喬親王の宮殿たりし渚の院趾また近き丘陵にあり、紀貫之その土佐日記に懷舊の情を寄せて弔へる親王遺愛の松、また古歌に多く見るのみ、今は尋ぬるに影なし、

牧野より約三丁に垂仁天皇の片野神社あり、繼體天皇の樟葉宮趾と共に老松蟠々として天を摩し、境は幽閑にして古色蒼然たり、その近傍を交野の原といふ、一に禁野と稱せしは、桓武天皇以來の御狩場にして、庶民の獵を禁ぜしがためなり、今なほ秋の草葉に鶉の啼く聲を聞き冬の空に鴻雁の群れ來るを見ること多し、

樟葉を過ぎて橋本に達す、橋本は大阪府と京都府の境にして、宇治川と木津川の兩水また淀川に合流するところ、滿目の地は青く水は清くして蜒々たる白蛇の纏ふに似たり、仰げは遠く攝河二州の連山に追はれ城丹二國の諸山に迎へられ、近く川を隔てし山崎と八幡の翠巒に包まれて、ほとゝぎす八幡山崎なきかはす聲の中ゆく淀の川舟と詠ぜしは、こゝなり、勝敗一決の歷史を語る天王山は武夫の弓矢神とせる男山に相對し、岸に臨み流れに添うて樹木鬱蒼たる間に家屋の隱顯せる景趣、自然の描ける一大名畫を展べて、曉鐘暮煙、晴雨霞靄、月さらに雪ます〳〵佳なり、橋本の名を起せし千年の河陽橋は今これを見る能はざるも、沒趣味なるべき京阪電車の鐵橋また却ツて斜に網を張れるが如く、その長く横たはれる網の目より山水の風光明媚を見る、我は常にいふ、文明の交通機關は風流の破壞物たれど、この破壞物の鐵橋を二重に架せられて更に風致を損ぜざるところは、只これ橋本の景あるのみと、

いたるところ爭うて別莊流行の今日、京阪の人、この橋本に別莊なきを我また常に怪しむ、橋本を過ぎて八幡の町に入る、町は男山の石清水八幡宮を以て名あり、昔は萬乘の君、今は百王の祖なりと大江匡房の天下に範を垂れしところ、男山また雄德山と稱ふ、伊勢の太廟に次いで神代ながらの境を照らす月影は曇らぬ人の心に澄み渡りて、峰の松風は絶えず千代の梢を吹き、萬世に動かぬ巖の苔蒸して、老松古杉の間に社殿は輪奐の美を極め、莊嚴の氣は全山に滿つ、太子阪、放生川、細橋、その他の名跡あげて數ふべからず、楠公正成の手植せし楠は老幹なほ當年を語るが如く、本宮北門の大西坊は大石良雄の祖先を出し內藏助また常に山科より參籠せしところ、神應寺の領に杉山不動あり、閼伽井、筒井、藤井、山の井、石清水を合はして男山の五名水とす、男山さらに山容の香爐に似たるがため香爐峰の名あり、別に鳩嶺ともいふ、

男山の麓に松華堂の墓あり、松華堂に世に八幡宮の松田伊豫守が子なりといへど、實は豐臣秀頼その侍女に生ましめ、大阪落城の前、竊に乳母をして抱き去らしめしもの、幼名は辰之助、長じて一乘院の覺法親王に仕へ、剃髮して松華堂と號し、また瀧本坊と稱し猩々翁といふ、古今の博學多識、天生の風流雅懷、詩歌俳諧その他の諸藝に通ぜざるなく、最も繪畫に氣品の高きを傳ふ、寛永十六年に沒し、墓は八幡町一民家の裏にあり、今日その片紙斷墨を千金に爭ふものあれど、來りて一縷の香煙を供するものなし、

小野頼風の塚と女郎花の塚は、その間に十餘町を隔つれど、平城天皇の御宇、頼風この男山の麓にありし時、里の女と契りしを都に深く言ひ交せし女これを悲しみ、頼風の住める八幡川の邊に山吹重ねの衣を脫ぎ捨てつゝ身を投げて死せり、秋雨に窻を叩かれし曉、その衣を見て頼風また哀れに堪へず、同じ川に死せりといふ、もし今日なれば失戀の極、女

は京都より持ち來りし蝙蝠傘と信玄袋と吾妻コートぐらゐを川邊に脱ぎ捨てゝ投身し、男は今更ら傷れる戀を悔い誓ひし良心に責められて、あゝ女郎花さん僕は貴孃に罪を謝しますと、また同じく水死せしもの、これを十餘町も隔てしは、後人、あまりに無情といふべし、

神應寺の境内に淀屋辰五郎の墓あり、浪華の長者にして日本國の富を集め、あらむかぎりの華奢全盛を極めて前代未聞の風流罪を恣にし、竟に罰せられて家財官沒の後、この八幡に放たれ、すぎし昔を夢に殘紅紫影の末路を埋めしところ、我その墓に芳志の酒を注げり、腰の瓢を取り出せしといへば、いかにも一代の風流兒に適せる手向なれど、實は八幡の停車場より櫻正宗の二合瓶一本を購ひ來りて注げり、

八幡を過ぎ、淀の川瀨の水車を以て世に唄はれし淀の町に入る、京都より三里、久世郡の西北に當りて、淀川の南岸にあり、城は元龜年間に岩成主税助の築きしところ、豐太閤の伏見城にありし時、寵姬淺井氏を入れて時人これを淀殿と稱し後世これを淀君といふ、荒れ果てし舊城の殘壘、殆ど崩れて碧羅に封じられ、形を失ひし堀は半ば埋もれて蘆葦に滿ち蛙鳴に閉ぢらる、當年を語るべき城内の古松また多くは枯れて薪となり、わづかに與抒神社の破れざるを見るのみ、

淀より伏見に至るの間、中書島あり、家康のため本多中書こゝに壘を築きしが、その後は遊里となりて、今日なほ紅燈の影に絃歌を聽く、寧ろ都會の花柳よりも却ツて別種の情致あり、

くれ竹のふしみの里といへるは、秋の野の道芝の露を踏み分けし古の伏見にして、文祿二年の伏見は豐太閤の居城と共に形勢一變し、天下政令の中心となりて、武家小路、町小路

二百六十餘町の多きに至る、曠世の英傑が乾坤呑吐の勢ひに作り出せし當時の繁華を想ふべし、さらに伏見城の雄偉壯觀は、いはゆる今日に殘れる桃山式の大美術を以て粉飾せり、物徂徠の豐公舊趾に寄せしもの（絶海樓船震大明、寧知此地長柴荊　千山風雨晴々惡、只作當年叱咤聲）源松苗また懷古の詩に曰く（丹樓昔日麗如霞、今見山桃萬樹花　追憶豐公功業大、黃金爲瓦亦非奢）黃金を瓦と爲すも亦た奢にあらずと稱せられし豐公の沒後、慶長元和の年を經て昔日の繁華また夢となりしも、德川幕府に參覲交代の諸侯なほ往來を絶たず、淀川舟楫の旅客また日夜集散の要津たりしが、維新後の變遷に迫られ、汽車開通のため俄然こゝに衰退を來せり、衰退また衰退の極、今年の三月より京阪電車の交通を得て漸く挽回せむとするのみ、恐れ多くも先帝の御陵、さらに三年以後この伏見桃山に定まらむとは、誰か知るべき、

伏見の地、南は宇治川の清流に添ひ觀月橋を隔てゝ渺々たる巨掠の大池を望み、西は八幡山崎、淀一面の重疊せる景を呑み、後に松原山あり桃山あり指月あり三夜莊あり、一として歷史文學に關せざるところなく、古今いづれも月の名所を以て聞ゆ、滿目四方の景物は花に雪に佳ならざるなきも、伏見の風光は秋の月に照らされて始めて誇るべし、

觀月橋また豐後橋といふ、豐公の當時この橋の架せる向島に大友豐後守の邸宅ありしがためなり、蓋し伏見の地名、豐公以前の古歌より出でざれば多く豐公當時の人名より出づ、

龍雲寺、大黑寺、桃山天滿宮、桓武帝陵、御香宮、いづれも世に知られて、御香宮の境內に、文珠九助の義民碑あり、九助は下總佐倉の木內惣五郎と東西一對の名を傳ふ、また京橋の寺田屋に勤王志士八人の殉難碑あり、いはゆる文久二年の寺田屋騷動なるもの、さらに面白きは久米仙人の舊跡とす、川端に物を洗へる女の白き脛を見て通力を失ひ、まゞ逆倒に天上より墮落せりといふ久米仙人は、卽成就院の僧侶たりしが、一切の火食を斷ちて

白菊を常食とし、その形見を白菊の石とて御香宮の傍らに止む、近年何物か一碑を建てゝ
東久世伯の和歌を刻せり、

仙人の昔のあとは白菊の
　千代のかをりに殘りけるかな

我また戯れに鉛筆を以て狂歌一首を紙片に書し、これを碑の表に張り付けて去る、

白菊の香よりも白き脛の香に
　をちこち響く癡け仙人

伏見にあらざるも、伏見の名を冠して最も世に聞えたるを伏見の稲荷とす、これがため今は稲荷新道あり、官幣大社、和銅二年の鎮座にして、五穀豐穰の神とす、われ賴む人の願ひを照らすとて浮世にのこる三つの燈火、この一首を古より稲荷大明神の御神詠と稱し、續古今集にも出でたり、古文古歌いづれも稲荷山を三の峰といふ、

藤の森、伏見街道より仰いで鬱蒼たる神境これを藤森神社といふ、古來の軍神として歷代朝廷の尊崇を受け、元寇の時も敵將七人の首を此神境に埋めて今なほ七個の蒙古塚あり、毎年の祭禮を行ふに渡御の列は悉く甲冑兵馬にして、世に藤の森の軍祭禮といふ、

墨染の櫻、荒廢せる寺中に鬼子母神の社ありて、里俗この傍なりしといふのみ、堀川太政大臣の薨去を悼みて、深草の野邊の櫻し心あらば今年ばかりは墨染に咲け、この一首によりて墨染になりしといふ傳說を口碑に殘せるのみ、世繼物語に實方中將の詠として、墨染の衣うき世の花盛をりすれても折りてけるかな、豐太閤の命をうけて細川玄旨の詠進に、あはれてふ色香をさとる櫻木の花の面かげ墨染にして、いつしか竟に地名となれり、撞木町、元祿年間は京の島原と相下らざりし繁華の遊里にして、大石內藏助の山科にあり

し時、この撞木町に隨一の遊女と唄はれし笹屋の浮橋が許に通ひ、その身また心なき女童の里言葉に、うき様と呼ばれて、幾夜の流連、不斷の狂態、宿醉いまだ醒めず傾城の膝枕に紅筆を舐めて小菊の紙を展べ、戯れに作りし端唄は、里げしき、

ふけて廓のよそほひ見れば、宵の燈火うちそむき寢の、夢の花さへ散らす嵐の誘ひ來て、閨を連れ出すつれ人男、よそのさらばも猶あはれにて、裏も中戸をあくる東雲、おくる姿のひとへ帶、とけてほどけて寢みだれ髪の、黄楊の、黄楊の小櫛もさすが涙のはら〳〵袖に、こぼれて袖に、露のよすがのうきつとめ、こぼれて袖に、辛きよすがの憂き勤め、

この端唄を浮橋に唄はせ、これを撞木町に流行らせ、紅燈綠酒の粉黛に溺れて、ありや赤穗浪人でなく、あはう浪人、大石ではなうて、はりぬきの輕石ぢやと笑はれし良雄の當時この撞木町の花街青樓いかに全盛なりしぞ、亡國の偉物をして思ふまゝに敵を謀らせし紅粉の地も、わづかに今は寂寥たる一二軒の娼家を殘せるのみ、寧ろ我は哀れを感ぜずして今日この名跡に見る影もなき一二軒の娼家あるを惜しむ、

古來詩歌の好題目たりし深草の里、東は谷口、西は竹田、南は墨染、北は稲荷、その間の一帶を總稱す、夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里、この名歌によりて鶉の名所となり鶉の床といふ、今なほ實際に鶉は多し、深草の十二陵は法華堂にありて、後深草、伏見、後伏見、後光嚴、後圓融、後小松、稱光、後土御門、後柏原、後奈良、正親町、後陽成の十二帝なり、瑞光寺は元政上人の舊跡、小野小町に百夜通ひしといふ深草の少將は、今日の欣淨寺その邸宅なりしといふ、欣淨寺の東、竹藪の間に通ぜる小路を少將の通ひ路と稱し、何事か心に願望あるもの乃至また訴訟に關するもの、これを通行すれば

必ず敗れて成就せずとの傳說あり、ために諸人いづれも昔は通行を避けしといふ、戀の百夜を九十九夜目の雪に凍えて死せし少將、いかにも殘念の程お察し申せど、つまらない恨を後世に殘せしもの哉、

深草の元政坊主死ぬさうな我身ながらも哀れなりけり、この一首を幾度も繰り返して、いはゆる三本竹の元政上人を弔ひし後、鳥羽街道の一端に出で、東福寺より大佛妙法院の友人を訪ひ、その家に旅裝を捨てゝ、五條の大橋に達す、

大阪の天滿橋を歩き始めとし、京都の五條橋を歩き終めとし、行程いかに曲折迂回するも二十里內外、その間に五日を費せり、故ありて別に必要の專門家二人を伴ひしが、專門家は只その必要に應じて數字的の調査せしめしのみ、傍ら我は隨處隨意の鉛筆を走らせ、この記を作る、固より旅行記の體をなさざるも、我に於ては旅行記の一部とす、

專門家に命ぜし數字的の調査を基礎とし、これに五日間の實地上より得たる我意見を加へ專務の桑原政と共に京阪電車の繁榮策を講ぜしもの、卽ち香里遊園地なり、

京阪電車に對して我は社員にもあらず株主にもあらず、たゞ京阪電車の最も注意すべき奮鬪期を背負うて立ちし桑原政のため、その朋友として一臂の力を供せしのみ、時に應じ事に臨みて必要の交涉以外、會社と我とは全然これ他人なり、

香里園

香里の地、寢屋川と牧方の間にありて、蹉蛇山に接續し、里人これを御所山といふ、いまだ確たる考證を得ざれど、御所山の名、その古は民族の居住たらざりしを知るに足る、蹉蛇山は蹉蛇天滿宮のあるところ、菅公の筑紫に左遷せらるゝや、息女こゝに追ひ來りし

が、既に發して及ばず、空しく天の一方を望み、蹉蛇して涕泣せしがため、蹉蛇と稱し、後人その舊跡に菅廟を建つ、

香里、實は郡の字なり、聊か詩的を加味して、假に香里と名づく、

京阪線路より僅に一町、丘陵起伏して松影參差の間に池水あり溪路あり、上るに從うて眺望いよ〳〵開け、入るに從うて幽趣ます〳〵深く、既に自然の一大園を成せり、

その高きに上れば四方の眺望さらに眼界を新にし、背後は所謂る八州山の稱ある蹉蛇山に松林連續し、前面は白布を晒せる如き淀川を隔てゝ薄く濃く丹波山城の諸山に對し、近く牧方の屋上を掠めて樟葉、橋本、八幡、伏見を翠色晴風の間に望み、首を回らして大阪市街の人煙は指呼の脚下にあり、

この自然の廣濶たる一大園に人工を加へて、京阪會社のため夙に桑原政の計畫せしところ半途に聊か躊躇すべき事情ありしを我に謀り、我これを激勵して寧ろ大に日夜の工を急がしむ、當時に於ける桑原の述懷に曰く、もし失敗せば内外一時の攻撃この身にありと、我は笑うて云ふ、手を著けざれば已む、既に著手せし以上、他を顧みず只これ馬車馬的たれと、

五月より九月に至るまでの間、殆ど日夜の別なく、山を切り崩して坡を作り道を通じ、荊棘雜草を刈りて前後に一萬坪の運動場を拓き、その間の丘陵起伏を利用して幾千の楓櫻を移植し和洋の花弁を點綴し、さらに京阪の料理屋を招致し、いたるところ山に倚り溪に臨みて家を作らしめ、以て林間の小亭に酒を酌み松影の樓欄に絃歌湧くの地たらしむ、

桑原政の友人に西浦某あり、某また我と友人たるの關係上、既に早くより計畫せしは、いまだ關西人の多く見ざる名物菊の花壇と共に精巧を極めたる菊人形の一大劇場なり、これ

に要する一切を悉く名古屋地方より運び來りて、香里の風色以外に別種の活躍を試みむとす、蓋し某は東京兩國の國技館を始めて菊世界たらしめしもの、年々の技倆と經驗とを遺憾なく發揮せり、

西浦の菊に對して我また勃々たる洒落氣を起し、香里の最も奥深きところ、溪を隔てゝ蛇山に對せる幽邃閑雅の地を選び、松林の間を縫うて青苔の滑なる涯に臨み、一の茶店を出せり、呼んで苫屋といふ、

屋根は悉く舟の苫を以て葺き、柱は悉く生えたるまゝの松を利用し、四方に壁なく四方の眺望を恣ならしめ、鄕里の堺浦より幾十枚の舟板を運搬して卓とし、支那燒の榻を隨意の處々に置いて腰掛とし、茶室また繩暖廉を垂れて蘆屋釜三個、京都妙法院の友人植山某に託して三日間に集めし黑樂の抹茶々碗三百三十六個、菓子は我みづから大阪に命じて織部菓子を作らしめ、菓子皿は赤樂にして黑く半面に青海波を描き、これを燒かしむるに植山某また工を督すること五晝夜五千枚、好事家の持ち去るに任すがためなり、茶の通ひは妙齡の處女八人を選び、千家の表と裏の茶坊主二人、これに附隨せる雜使九人、苫屋の廣さは一時に百人以上の客を容れて餘あるべし、茶室の上に我みづから書して曰く、賣茶得錢何所爲、

秋は淸く境は幽に風色ます〳〵佳なり、時と地と事と相待ツて離るべからざる我こゝに茶を賣るは、敢て世間の人を茶にするにあらず、またこれ快心の一道樂なり、

この一道樂も實は道樂以外、別に故あり、香里の地域、いたるところ既に料理屋あり茶屋あり會社設備の休憩所ありて、加之も元來は繁榮策を目的として群集雜踏は寧ろ大に期待するところなれど、その雜踏中、たま〳〵閑雅淸遊を欲する人のため、また知名の人士を

招するがため、さらに第一は桑原政と我とを來り訪ふべき諸友談笑のために設く、日夜の設備、既に悉く整ひ、九月十五日、一般公衆の遊園地として、こゝに香里を開放せり、我苫屋を開きしは其の十七日、

内外に多少非難の聲ありて、頗る其成功を危まれし香里園は、忽ち京阪人を動かして豫想以外の雑踏を來し、乘客いまだ滿ちし事なき京阪電車は發車毎に喧嘩腰の滿員また滿員、間斷なく左右より擦れ違うて悉く香里停車場に吐き出され、吐き出さるゝ男女老若は山に向うて蟻の傳ふが如し、

香里の秋色、固より佳なるも、その風光の佳絶中、京阪の繁華を吸集せる京極と千日前にも見るを得ざる十餘場の演劇的菊人形と最後の五段返しを無代價に觀覽せしめしは最も婦女子の喜びに投じ、いたるところ丘陵起伏せる林間松影の旗亭また頗る酒客に適し、廣々たる前後の運動場さらに學校生徒の秋期運動を迎へて、これを呑吐する停車場その雑踏を制するため新に柵を設くるに至る、

我苫屋は始めより俗客の俗集を願はず、殊更に代價を定む、織部菓子三個に抹茶一服、これを十五錢とす、白狀すれば、實費五錢二厘に當る、錢勘定の機敏なる京阪人に向うては或意味に於て、聊か一種の追ツ拂ひ策なり、

何ぞ圖らむ、この追ツ拂ひ策、なか〳〵に成功せず、寧ろ反對に逆襲し來りて、濟まし込みし茶坊主は俄に狼狽へ出し、通ひの處女八人は目を舞はして驚き、雑役に供せし九人の男は腰を卸す暇なく、最も勘き時は一日三百人内外、多き時は五百人前の菓子の盡きしを以て終とす、我こゝに於て内規を改む、曰く、茶碗も菓子皿も乞ふ人によりて進呈する筈なりしが、もはや一枚も與ふべからずと、通ひの處女ども笑うて云ふ、急に先生も商賣氣

を出しやはッたと、我豈今更に吝臭き商賣氣を出さむや、この調子では必ず半以上の破損あるがためなり、汝等また袖袂の破るゝは可なれど、叨りに人のため身を破らるゝ勿れと悠々寛々たる懐手のまゝ遊び半分の洒落に營みし主人の我、をり〳〵は茶坊主の飯時に代理をさせられ、わざと客に紛れ來りて不意に我を引ッ張り出す惡戯ものあり、また京阪の藝妓を連れ來りて自己も共に終日の手傳ひする暢氣ものあり、或は五人十人を伴うて茶代も拂はず歸りがけの土産に持てるだけの菓子を持ち去る友人あり、わざ〳〵我に挨拶して三圓五圓を紙包のまゝそッと置いて去るものあり、一切の酒食を禁じたれど、その一例を擧ぐれば、長田秋濤の如き數人の友と共に神戸より押し掛け來りて、この神聖なる茶室に牛肉の罐詰を開きウイスキーを瀧呑みの秋濤流また尠からず、日々種々の來客中、たゞ床しく思ひしは、見る影もなき落魄の人にして始めより茶代なきを謝しつゝ一服を乞ひ、その服するところを見るに立派なる茶人たりしもの、前後六十日間に三人あり、これには我みづから二服目を進めて、記念のため茶碗と皿と幾何の金とを呈せり、あはれ如何なる名家の末路なりしぞ、苦屋の外に低徊して暫し去る能はざりしは、人間の盛衰、定めて今昔の感に堪へざりしなるべし、

この苦屋に日として來らざるなき知人十餘頭中の名物男に難波二郎三郎あり、我より長ずること十六年にして、常に東西相隔てしが、我とは一朝一夕の交りにあらず、多年往來の交友たり、その全盛期に大阪商船會社の專務取締以外、五指に餘れる銀行會社の重役を兼ねて關西の財界を横行濶歩せしは普く人の知るところ、さらに一代の通人を以て聞えたる名は恐らく關西のみにあらざるべし、晩年の失脚、暫く影を晦ませしが、三年以前、たまゝ我の須磨に滯在せし時、明石より一書を寄せて曰く、日本米に見放されて南京米を

食ふ痩浪人こゝにありと、蓋し清商吳錦堂の顧問となりて明石に籠居せしが、吳錦堂と意見衝突の結果、また大阪に歸りて、たま〳〵我の香里にあるを聞き、この苫屋を見るや、洒落れたる哉と手を拍ツて喜び、晴雨ともに來りて談笑す、桑原政また久しく相識る元來この苫屋の半は我休養所とし併せて知人間の談笑するところとせしに、全部を案外の繁榮に奪ばれて、その煩に堪へざるがため、畫間は避けて多く桑原の別莊にあり、別莊いまだ竣成せざれど、蹉蛇山の麓、香里へ入るの左側丘上、松林を以て包まれ、眼下の池に臨みて四千餘坪、緣先の庭前に松茸を生ず、

一日この別莊に集るもの、桑原政、難波二郎三郎、たま〳〵東京より來れる岡崎邦輔、その他に數人いづれも多少の名を知られしもの、我は最も年少者として四十四歳、世間の眼底には殆ど老人の寄合なれど、氣の若きのみならず、ふしぎに容貌また若くして、松影參差の下に茶を啜りながら、おの〳〵無遠慮に好きな熱を吐き合ふ、絃歌の間に一夜千金の豪奢を極むるよりは寧ろ快なり、否、實は一夜千金の豪奢に飽いたる人間のみなり、人生の古兵にして花柳第一の先輩者たる難波の言に曰く、今年こゝに六十歳、今これから七八年の乞食に落ちても、まだ昔の奢りに申譯は足らない、差引勘定お剩が出ると、一坐大に笑ふ、

我は隔日に大阪と伏見を宿とし、朝は七八時ごろに來り午後は五六時の間に歸る、大阪は浮世小路、伏見は豐後橋の澤文とせしが、こゝに一場の滑稽談あり、京都澤文の本店主人は能く我を知れど、伏見の澤文は男女ともに我を知らず、我また敢て姓名をいはず、わざと久しく假名を用ふ、一日、大阪朝日新聞の社中友人より我に原稿を送り來る、その原稿は京都支社の主任中川某より本社へ送りしものにして、大略に曰く、近來不思議の一紳士

あり、年輩四十前後、絶えず京阪電車より伏見に降り、直に俥を飛ばして澤文に入るや、頗る豪奢を極む、伏見警察署これを怪しみて刑事三人澤文を取調べし結果、たま〳〵前夜その室にて女中が拾ひしといふ一枚の名刺を得たれど、寧ろ却ッて本人の名刺を偷めるものとし、竊に捕縛の用意せしが、念のため警官の一人これを京都の支社に問ひ合はせ、その容貌風俗は果して名刺の本人なりと知りしため、堅く澤文に命じて取調の一切を秘密にせしめしといふだけの事なれど、實は當時岡山邊より此の京阪間に入り込みし出沒自在の一大强盗ありて、その强盗の寫眞は頗る我に肖たるがためなりと、あゝ我は君子に肖ずして强盗に肖たり、

もし不運にして其夜伏見に入れば、刑事に向うて罵倒のみに止まらざる我いよ〳〵怪しまれ、兎も角も一度は此野郎とフン縛られざるべからず、幸ひ其日は早くより香里を出でて京都の嵐山に夕陽の景を賞し、三軒家の離れ座敷に枕頭の水聲を聽いて睡れり、

香里に於ける日々〳〵增加の群衆ます〳〵多きを加へ、土曜日曜の如きは終日その歸るを忘れ暮色に促されて一時に發車場へ雲集する勢ひ、をり〳〵婦女子の悲鳴を聞くに至る、

十一月三日は二日の午後より大雨となれり、桑原政これがため眉を顰む、我は云ふ、そも〳〵今上陛下の天長節に雨は殆ど稀なり　明日は必ず快晴なるべしと、我その夜は伏見にありしが、豪雨ます〳〵激しく暴風これに加ふ、あらむかぎりの設備を盡せし一年一度の大祭日、或は無用に歸せむかと思ひしに、午前三時頃より風雨の止みしのみならず、曉天の旭日、紅の如し、されど此日東京よりの電報は大暴風雨なりしと、

秋氣ます〳〵清朗、前日の雨に塵埃なく、樹木は悉く洗はれて地は殆ど拭へるが如し、大阪の大滿と京都の五條に於ける乘客は先を爭うて道路に溢れ、發車毎に危險を制する警官

の聲は涸れ、香里の停車場は柵を破りて押し寄せ、全山これ人を以て埋む、さらに午後四時頃より六七時の間、山を出で阪を下りて歸路に就くもの、これを高きより見れば、雲霞の如しといひ潮の如しと稱し人浪を打つといふが如き由來幾何の形容詞は殆ど名狀の價値なく、只まツ黑に動ける連續的の一大偉觀にして、その黑き一大偉觀の動搖せるのみ、京都よりも大阪に歸るもの十中七八の割合に當りしがため、間斷なき電車また急に十臺中の七八を悉く牧方より引返さしめ、加之も其の電車に乘り得ずして線路を徒步せしもの、終夜殆ど魚貫せしといふ、

我これを指さして桑原政を顧みれば、破顏一笑、無言のまゝに感謝せり、その感謝を受けし我また一種いふべからざる無量の快に堪へず、人間は順風に帆を揚ぐるが如きよりも、寧ろ多少の攻擊非難に反抗して豫期以上の目的を達せし時、最も痛快を覺ゆ、

九月十五日、この香里園を開き、十一月十五日、この香里園を閉づ、閉ぢたるは一般公衆の來るを閉ぢたるにあらず、京阪電車の繁榮策まづ案外の好結果を得たる一段落として總ての設計こゝに止め、我は桑原政に對する朋友の信賴を遺憾なく遂げしものとして、我また苫屋を閉ぢたり、その六十日間、これを我一身に取れば實に愉快なる一大遊興なり、これに要せる前後の半歲を閑日月とすれば、さらに面白き旅行中の逸事なり、

苫屋を閉ぢし時、記念のため茶器一切を京阪間の知人に分ち、その餘れるを東京の朋友に送れり、使用せし男女に約束以外の物を與へて去らしむ、去るに臨み、八人の處女いづれも聲をあげて泣く、わづかに六十日間といへども、自然の人情あはれに愛すべし、

十二月十七日を以て東京に歸り、また書齋の人となりて机に對ひし時、既に過ぎ去りし遊興逸事の外に於て、その半歲に得たるところを詮じ來れば、聊か群衆心理といふものゝ一

端を實際の上に試みたり、理論以外、學問以外、多少その機微に接するを得たり、人間個個の理性を沒却して群衆の一致動搖といふ點に頗る面白き呼吸を見出せり、古今の英雄これを人心の收攬といへど、實は天下の衆愚と見て巧みに利用せるのみ、

言文一致

比較的、人よりも多く旅行せし我こゝに始めて旅行記を作りしが如く、いたるところ言文一致の今日、いまだ言文一致を用ひざりし我、こゝに始めて言文一致を試む、

されど言文一致に馴れざる我言文一致は、旅行記にして旅行記の體をなさざると一般、言文一致にあらざるやも知るべからず、その材を明智光秀の幼少より鄕國を去るまでの間に取れり、

史家は別に史家の筆あり、我は只こゝに思ふがまゝを包まず言葉のまゝを飾らずして縱横無盡の座談的に明智光秀を語らむとす、固より歷史家の穿鑿以外にして世評の定論以外たるは覺悟の前なり、俳人の句に曰く、ものずきの虫は來て啼け蓼の花、

いづこの誰にも持て囃さるゝ梅櫻桃李を棄てゝわざ〳〵人の好まぬ蓼の花に啼く、これも實は蟲の故なり、

明智光秀

曾て石田三成を著はし今またこゝに明智光秀を語る、いかにも拗ねて世の中の憎まれものばかりに謳歌するやうだが、決して片意地に奇を好む業でない、殊更に萬人の定論を破りたいがためでもない、

結局その憎まれものゝ失敗者は、其時の天下に附和雷同せられた成功者の唯一なる對照物で、加之も千古遺憾の涙を呑みながら甘んじて後世の賊名を負ひつゝ苔の下に埋められた大不運の大英雄で、もし一歩の運に先んずれば忽ち主客顚倒して正しく彼に代るべき筈の是であるのみならず、時の成功者を以て其の性行が悉く道に叶へる義者でないとすれば、それに對する時の失敗者また敢て悉く道に反いた不義者ばかりであるまい、

わけて明智光秀の如きは、我國の歴史上、どさくさ紛れに最も證據の湮滅し易い戰國時代で、おまけに豐太閤といふ、古今獨歩の一人、どえらい奴の運命と出合頭の鉢合はせをしたがため、本能寺の曉に飜した水色桔梗の旗は、長く姓名の上に逆賊の二字を冠せられ主を殺した天罰の報いは目前これを見よと、淨瑠璃の文句にまで唄はれて、憐れむべし、明智光秀といへば、殆ど日本國の不忠不義を一人で背負ッて立たされたやうな觀がある、寧ろ當時の武者氣質に實際の評をうけた明智光秀なるものは、まさか斯うも無慙に嚙んで吐き出す如く逆賊呼ばはりされなかッたかも知れないが、豐太閤の後をうけし德川氏の政略上、その危險思想を絶對に撲滅するがため、猶更ら手嚴しく死屍を鞭たれたかと思はれる點がある、まして淨瑠璃といふ津々浦々まで行き渡ッた音曲入りの面白い大廣告は、今日都會の一部を練り歩く一時の樂隊廣告よりも、頗る永久に適切に恐しい效能があるため、いよ〳〵以て明智光秀は主殺しの大罪人といふ高札を天下に建てられた、

そも〳〵明智光秀が織田信長に對して當時の事實上、これを正當の君臣とすれば、なるほど君を弑した逆賊である、しかし後世の早呑込でいふ戰國時代の君臣なるもの、別して明智光秀の織田信長に於ける關係は世の所謂主從なるものでありしか、まづ第一この穿鑿が必要である、

その穿鑿は暫く措いて、そも〳〵織田信長は元來いかなる人であるかといへば、光秀より一歩お先へ立派な御手本を示した謀叛人の子で、これこそ正しく父祖傳來の君を弑して自立した織田信秀の總領息子である、卽ち織田家は代々尾張の國を領し來ツた斯波武衞家の世臣で、加之も他より恩を荷ふこと更に最も深く最も重き家老職の身で、その臣として數代相傳の君たる斯波氏の血脈を踏み潰し所領を奪うた信長といふ事は最も事蹟の明白なるに拘らず、どういふものか不思議に罪名を遁れて寧ろ主從の關係すら嚴格の意味に於て明白ならざる明智光秀が、當時の勢ひ何人を置いても堪へ難き悲痛慘憺の極に餘儀なく本能守を襲うた事のみが、末代不滅の逆賊に唄はるゝとは、實に氣の毒の至極である、また山崎の一戰に敗れて勝龍寺より阪本へ落ち行く途中、小栗栖の藪蔭で竹鎗に突かれて死せしといふに至ツては、殆ど兒戲に類した一片の小說的に此英雄の末路を葬り去ツて仕舞ツた、

元龜天正ごろは日夜間斷なき戰國の必要上より最も甲冑に意を用ひた時代で、源平以來の名乘を揚げた一騎打に對する華美虛飾を去り、四方當面の鐵砲玉も防ぐべき實用を重んじたのみでなく、この明智光秀は當時に聞えた武具の精通者で、みづから好んで自家著用の鎧を縅しだといふほどの事實がある、その百戰を經來りし用意周到の具足胴が土百姓の藪越に、加之も手伸びに突き出した闇紛れの竹槍で、みごと脇腹に致命傷を與へ得らるゝものか、但し縅しの塗札を上辷りするものか、もし突けば寧ろ竹槍の尖端が割けて用を爲さぬものか、頗る面白い趣味のある研究問題といふべしだ、しかし主殺しの逆賊で丹波丹後二個國の大々名も土百姓の竹槍に突き殺されたといへば、みせしめの後世に對して、實に此上もない天罰に出來て居る、

そも〳〵明智光秀は、土百姓の竹槍で小栗栖に死せしものか、或は生きて世を忍び名を變へて、人しれぬ案外の個處より無名の英雄として如何なる痛快事をなしつゝありしか、夕顔棚の此方よりでなく、爭ふべからざる事實の上より、あらはれ出づる白髮童顏の明智光秀を御覽に供したいくらゐだ、

君臣と稱し主從といふ語に事實の穿鑿を用ひず、たゞ用語の習慣上、さのみ重き事と心得ずに、あまり輕々しく平氣に濫用し過ぎて大安賣に書き散らせし野史家のため、わけて混亂せる群雄爭奪の戰國時代には、よほど本末を誤り順逆を顚倒した事が多い、

現に太平記の如きは、後醍醐帝を足利尊氏に對して、恐れ氣もなく眞面目に「天皇の御謀叛」と稱してある、一天萬乘の君だけに御の字を加へたので、露骨にいへば、後醍醐天皇を反逆人と見奉ツた結果である、

それは偖措いて、天正十年六月二日、本能寺の夢を破ツて東天の空に翻した水色桔梗の旗風は、果して君を弑した逆賊の業であるか、その明智光秀と織田信長との關係、乃至また事こゝに至りし衝突の原因を語る前に、ちよいと光秀が爲人の一端を示すべき必要がある、

全體この明智光秀は、たゞ一朝の敵本主義を以て後世に傳へらるゝ如き冷酷殘忍の急激性を帶びた人物ではない、實は寧ろ寛大忍容の雅量を帶びた長者風で、加之も其ころ稀有の學者で、また時の利害に應じて妻子眷族を一の交換物とした虎狼の戰國時代には、わけて珍らしい愛情の溢れたところがある、

その一例は、美濃源氏の嫡流で土岐氏の家に生れ、敵のために一家一門を亡されて國を出奔し、みる影もない素浪人となツて世を忍びながら四方に漂流した艱難辛苦の間も、その妻を放さず引き連れて流れ歩いたといふ事は、古今の歴史中、まして屍山血河の戰國武士

中に類のない特殊の情を湛えた人である、

いふまでもない當時の形勢、我國に於て最も四分五裂の甚だしい群雄割據の爭鬪時代で、いたるところ城を築き砦を構へ關門を据ゑて、寸隙もなく嚴重に日夜の出入を守る折柄、

苟も見馴れぬ他國者の浪人として渡り歩くには、自己の一身すら覺束ない、うか〳〵すれば忽ち敵の間者として二の句もいはさず、ひッ捕へて縛り首を刎ねらるゝのみか、たとひ無事でも、いつ何時、どこから不意の矢玉が飛んで來るかも知れない危險千萬な中を、六年の長き星霜、わざ〳〵足手纏ひになるべき妻の手を引いて四方に漂流した優美さは、實に萬綠叢中の紅一點、この明智光秀にして始めて演じられ、血腥き鬱風時代、この妻にして始めて伴ひ行かるゝ情緒纏綿である、もし一歩を過れば、夫婦もろとも名もない雜兵の手にかゝッて堀の埋草に投げ込まるべき運命、たかが新聞に出される浮名の覺悟ぐらゐで、妄りに口ばかり戀は神聖と叫ぶ今日の青年男女、どで御坐る、

加之も光秀の妻女は音に聞えた絶世の美人で、光秀が一時の急を救ふため長なす黑髮を切ッて僅の錢に代へたといふ傳說もあるほどの女、いかに六年の艱難中その良人を知らぬ他國の空で慰めたか、他日、丹波丹後の二國と江州の一部を領して天下の耳目に惟任日向守と立てられたには、確實に內助の功が多かッたのみならず、その生むところの娘に、我國の烈婦傳中に稱せらるゝ細川忠興の妻あり、眼前の强敵に圍まれながら靜に紅粉を粧うて死に就きし織田七兵衞信澄の妻あり、また我弟の娘を預ッて幼少より手許に育てし女には、成長の後、世に名高き春日局あり、男の子は天壽丸とて十一歳、これが演劇淨瑠璃十次郎、船木某といふ家來の屠腹に倣うて美事に腹かき切ッた麒麟兒の母親である、

つまり今日の所謂る良妻賢母を遺憾なく戰國時代に發揮した女流の傑出である、

さらに光秀が山崎の一敗を聞くや否、阪本の城中に三千の將士を取纏めて生死おの〳〵分に應ぜし自由行動を取らしめ、かの湖水渉りに名譽を殘せし同苗左馬之助をして多年の珍器名物を目錄と共に城外の敵陣へ贈らしめ、おもむろに門葉類族の屍を點檢せし後、城に火をかけ炎々たる猛火中に泰然自若として死を見ること殆ど禪三昧に入りしが如く終ッたのは此妻女である、

ところで此妻女の良人となり、また以上の子どもが父となりし明智光秀の家庭は、果して不忠不義の名を唄はるべき逆賊の家庭なりし乎、さらに光秀が養ふところ將士三萬、雜兵葉武者の末に至るまで多年の間、一人として夢にも怨嗟の聲を聞かざるのみか、山崎の一戰に枕を並べて平生の恩に酬いし累々たる死骸の中より、なほ生き殘りながら半死半生の身を躍らしつゝ寄り來る敵を覘ひ、蝗の如く飛び付いたものゝ多かッた體を見て、あゝ日向守が侍を養ひし心がけの十分一、もし右府公に持たせたらば今日の事あるまじと、流石の秀吉をして歎息せしめた明智光秀なるもの、果して不忠不義の逆賊となるべき人でありし乎、

理窟は偖措いて、いよ〳〵本能寺の曉に達するまでの慘澹たる事實を語らう、いや其の以前の順序として、まづ明智十兵衞光秀のため、あまり世に多く傳はらない傳記から語らう、姓と氏との穿鑿は別として、まづ我國の武門武士なるものは、いづれも源平藤橘の末で、大河の支流が八方へ氾濫する如く世の進むに隨ひ人の多くなるに隨ひ、その支流より支流が出來て、ます〳〵系統が分離し種族が繁殖し、果は縱横無盡に入り亂れて分らなくなッて仕舞ッた、そこで已むを得ず家門類別の必要上、おの〳〵簡單に分り易く其國の生產地を取ッて、つまり郡とか村とか名所舊蹟とか、土地の名を冠して自家の苗字に呼び始めた、

わけて頼朝の鎌倉時代に最も多く用ひられたが、いまだ當時は生産地といふよりも寧ろ占領地といふ方に重きを置いて、いはゞ武門を標榜する一種の手段で、また殆ど同族の黨名に等しく、その門葉の團結力を以て共有した地名が、自然の勢ひ、他國他門に對する便宜上、いつしか其の類族中の頭角を現はすものゝために專有せられて、應仁以來、元龜天正の頃は既に純然たる一個人の姓氏となッて仕舞ッた、

明智光秀また此例で、世にいふ美濃源氏の嫡流、清和天皇の後胤たる源頼光より五代の末、光信が始めて美濃の土岐を有して土岐氏と稱した、その光信の孫に當る光衡が文治年中、宗家の筋目なりし鎌倉の頼朝に隨ひ、大に軍功を立てゝ濃州一國を領し、美濃守と稱したが、その光衡の子孫で土岐伯耆守頼清から分れた一族に、土岐彦九郎頼重といふ人が始めて東美濃の明智に住んで明智の姓を稱したのである、

當時この美濃は岐蛆川（木曾川）を隔てゝ東西に分ち、その西美濃といふのは、加茂、各務、厚見、方縣、中島、安八、席田、多藝、石津、不破、池田、大野、山縣、武儀、郡上の諸郡で、東美濃は、可兒、土岐、惠奈の三郡である、

この可兒郡に住んで、その所在の明智を始めて名乘ッた土岐彦九郎頼重の子に、幼名を氏王丸と稱して明智十郎頼篤といふ豪傑が出た、これが明智家の二代目で、大に四方へ明智の雄名を馳せた人である、その頼篤より八代目、明智監物光國といふ人の長男に生れて、天生この子は必ず我家を興すべしと一門の内外に珍重され、先祖二代目の頼篤と同じ幼名の氏王丸を許されたのが卽ち明智十兵衞光秀である、

美濃の國の可兒郡で明智といふ土地は、當時いかなる市街であッたか村落であッたか、乃至また城を構へて居ッたかといふ事は、光秀の出身上、わけて一旦その國を出奔し四方に漂

浪したがため、猶更ら忽にすべからざる大切の關係がある、平家の亡滅以來、大阪の元和落城に至るまで凡そ四百三十餘年間、諸國に於ける廢城を調べて見ると、美濃の國には、長森、松尾、瑞龍寺、宇留馬、瀬戸崎、今尾、竹鼻に竝び稱せられて正しく可兒郡の明智城とある、また光秀の國を去ツた原因は、同國稻葉山の齋藤義龍に攻め落され、僅に身を以て逃れたとあるからは、いかにも美濃源氏の嫡流たる土岐の一族で、儼然たる城廓を構へて居たらしく思はれる、

しかし我國で城と名の付いたものは、壽永二年、平家の構へた攝津の一の谷が嚆矢で、その後百四十九年を經て元弘二年、楠木正成が河內の千劍破城で、さらに百二十餘年の後、管領上杉定正の執筆たりし太田道灌が江戸城を築いてより、應仁の亂に入ツて諸國の武門武士が日夜爭鬪の必要上、俄に爭うて到るところ城を築き始めたものゝ、實は當時いまだ後世の所謂る城らしい城でない、現に天下を掌握した賴朝の鎌倉幕府さへ、やう〳〵土居を續した一個の屋敷住居で、比較的その構造の進歩した江戸城さへ、これを呼ぶに靜勝軒の名を用ひたくらゐ簡單なもので、たゞ地勢を利用して嶮に據り柵を構へたといふだけの事、つまり物見臺とか木戸とか亂杭とか逆茂木とかいふ單純の名稱が殘ツて居る理由で、なか〳〵後世の我々が目にある如き規模の壯嚴雄偉なるものでない、まづ館の堅固を旨として、わるくいへば山賊の棲窟に等しいものである、

ところで應仁以來この城を天下の大勢上より打算して、攻守百戰の利害得失に推考した結果、大に我築城の一生面を開いたのは織田信長で、天正四年、近江の安土に堅牢無比なる宏壯の城廓を構へ、加之も始めて雲を凌ぐ七重の高矢倉を起し、これを名付けて天主と稱した、

全體この信長は、叡山を燒き高野を攻め日蓮宗を押し込め石山の本願寺と數個年も戰ひながら、その一方には南蠻寺を建立して耶蘇の天主教を奉じた人で、十字架の影像を此高矢倉に祀ツたがため、天主閣と稱した說もあるが、また一說には當時いまだ我國に渡ツて來た宗教は悉く羅甸語で、デウス宗とかデイウス宗とかいふ外に、漢字の意譯たる天主教の文字を知る筈がないから、やはり佛說の三十三天の主なる梵天王を取ツたといふ事である、

兎も角も織田信長の江州に築きあげた安土城が、我國に於ける城廓の最も大成完備したもので、そも〳〵この繩張と構造とは何者の苦心慘憺より出でたかといへば、當時まだ山賊の棲窟に等しい明智の城を生命から〴〵遁げ出して、四方へ漂浪した六個年の間に人知れず研究した其時の築城學者、實に明智光秀その人である、

信長の祐筆たりし太田和泉守の筆記に「心も言葉も及ばれず」と驚歎せし此安土城の要害堅固にして宏大莊嚴なる、天主矢倉の普請奉行は木村次郎左衞門、大工頭梁は岡部又右衞門、小細工は宮西遊左衞門、金具の彫刻は後藤平四郎と對阿彌の二人、漆師は首刑部、畫工は狩野永德、瓦師は明國人一觀、いづれも天下の名工名匠を集めて、これが總裁の任に當りし明智光秀は、いかに當時殺伐の武門中に珍らしい特殊の美術心と技術技藝とを備へしか、また後に自分の居城として阪本城の天主閣を築ける時の如き、四方の諸侯は爭うて其の構造建築を學びしといふ事實もある、時の宗匠三甫この阪本の天主を歎美せる發句に「波間より重ねあげたる雲の峰」光秀その脇句に「磯山づたひ茂る杉村」また阪本に遠からぬ近江八景の一なる唐崎に一株の松を添へて植ゑし時「我ならで誰かは植ゑむ一つ松」ところして吹け滋賀の浦風」本能寺を襲ひし前夜も愛宕に百韻の連歌を催せしが如き、餘情

優美、逆賊の名には甚だ不似合の光秀である、

いや、調子に乗り過ぎて談話が横へ外れた、立て直して光秀の本傳に入るが、以上に演べた如く、後世の所謂る城らしい城でない明智城に生れた明智十兵衞光秀、いかに美濃源氏の嫡流でも土岐の一族でも、もはや歳月と共に祖先の名聲が次第に薄く衰へて來た當時、つまり名ばかりの城で、その可兒郡の一郡さへ保ち兼ねて、そろ〳〵齋藤家のために蠶食しかけられた折柄である、

國により郡によりて大小豐凶の差別はあるが、此ごろ濃州一郡の平均まづ一萬石として、天正桝は京桝の九合六勺に當り、おまけに戰國の百姓は野武士的の惡風を帶びて、勤もすれば年貢米を竹槍に突き崩さうといふ勢ひで、實は七八千石の上を、また齋藤家に喰ひ缺かれたとすれば、當時の明智家は多くて五千石、人しれぬ內證の苦しい三四千石の貧乏世帶であツたかも知れない、加之も太平の三四千石でなく、四方八方から敵に寸隙を覘はる

る三四千石は、よほどの火の車に相違ない、

織田信長が尾張の那古野城（名古屋）に生れて、父の信秀が別に三城を信ち、豐土の二郡を專有して居た時でさへ、その信長が吉法師の幼時、天王坊へ書を學びに行く姿は、賄料の足らざりしがため、わづかに粗服を纏うて一僕を召連れたばかりといふ事實がある、

して見れば東美濃の一郡を削り取られて、天正桝の五六千石より敵を防ぐべき用意の餘分で育てられた明智光秀の當時、いかに簡單質素なりしか、以て城といふ城の形狀も想ひやられる、

ましてこの明智城を覘うた齋藤家は、既に殆ど美濃の七八分を斬り從へた稻葉山の大敵、いはゆる音に名高い齋藤道三入道秀龍の一子齋藤治部大輔義龍である、

しかし明智家は流石に土岐源氏の一族、この濃州では久しく世に聞えた累葉の武門で、今は名ばかりの空大名にもせよ、たとひ昔時の面影はないにもせよ、敵に睨まれて其まゝ首を縮める事は出來ない、加之も自己が領分を喰ひ缺かれた奴に向うて猶更ら腰を屈めないも脱げない、叶はぬまでも一戰の曉、取られた土地を取返すか、腹癒せの思ふ存分に戰うて亡ぶか、運よくば機に乘じて祖先の業を擴張するか、をめ〳〵怨恨ある奴の脚下に屈するよりは、潔く取ツ組んで敵の咽喉笛へ喰ひ付かうといふ、これが當時の武者氣質で、どうせ長いものに卷かれるといふ、後世の算盤勘定は先天的に許さない、

ところで此時の明智城は、父の監物光國が早世して、家を嗣いだ十兵衛光秀いまだ十九歳兵庫助光康といふ叔父が後見して、光秀の徒弟に當る光康の子ども二人と以上叔父甥四人が城の主人で、館樣と稱せられ、あとは五百人ばかりの家來である、加之も五百人の家來は祖先より傳來の家來で、互に放しもせず放れもしない主從の哀れさ、當時の知行では迚も充分に養ひきれないから、その七八分は鋤鍬を取ツて、つまり屯田兵となりながら、やう〳〵わづかに明智家の面目を保ツて居た、

その明智家が稻葉山の齋藤家に亡ぼさるゝ前、この城の主人たる十兵衛光秀に關する、一の戀沙汰を語らう、

名を聞けば恐ろしき他日の惟任將軍明智光秀も、落花流水の情、まだ十九の時は女に惚れられた案外の色男であッた、

明智光秀の幼時、いかなる兒童でありしかといふ事は、少しも世に傳はらない、もし光秀をして天下の成功者たらしめば、必ず家康の如く秀吉の如く、その幼年時代を最も面白く

趣味多く小説的に傳説さるべき人であるが、たゞ逆賊の二字に過去の一切を塗り潰されて仕舞ッて、いはゞ殆ど織田信長の最後を刺すために生れた如く傳へられて居る、

しかし土岐の一族で東美濃の明智に住し、その明智の姓を始めて世に現した八代の祖先、明智十郎頼篤の幼名と同じ名を付けられて、氏王丸と稱せられた光秀の幼時は、いづれ凡童でない、いふまでもなく、前途に深き希望を屬せられたもので、加之も次第に衰へて來た明智家には猶更の事、一家一門これを末頼母しく畏敬したに相違ない、

父は監物光國、母は同じ土岐の一族で揖斐氏から分れた稲木某の女、その間に生れたが早く父母を失ひ、叔父の兵庫助光康に養はれて、十六の曉に首服を加へ、十兵衛光秀と名乘ッた、これまた祖先の十郎頼篤と同じ十の字で、彼は兄弟十二人の十人目なるが故に十郎と稱し、これは一粒種の長男なるが故に十兵衛と稱した理由で、いかに幼時の光秀が一門の内外の重んぜられたか、いかに光秀の將來が明智家の名をあげた祖先と等しく見られたか、その性行は確實に家門再興の兆を含んで居たらしい、

この光秀は天文二年五月九日の誕生で、もし他日の關係上、避くべからざる對照物となッた因縁の深い人々を見廻せば、第一に暗劍殺の織田信長が母の胎内に宿ッた歳で其の翌年に生まれ、豐臣秀吉が尾州の草叢に産聲をあげる三年以前、參河の岡崎に卵子の殼を破ッて出た德川家康は九年の後で、御代は後奈良天皇、恐れ多いが宸筆を僅少の鳥目で容易く誰にでも賜はッたといふ朝廷衰退の極、また將軍家は足利十二代の義晴、いつしか柳營の武威權力も盡き果てゝ、もはや諸方へ流浪すべき自然の運命に餘儀なく應じかけた時である、

また氏王丸が元服して明智十兵衛光秀と稱した十六の時は、信長十五歳、父信秀が死する

前年で、いづれ當時の戰略上より來た皮肉の畫策であらうが、實は早熟の本人そろ〳〵色氣付いて美濃の齋藤道三が娘を嫁に欲しいと言ひ出した時、また秀吉は十三歳、どこの梢を傳ひ歩いて居たか、この猿どの中村の親里を飛び出したまゝ行方の知れない時、家康は八歳の竹千代で、やう〳〵尾張の人質を遁れて歸るや否、すぐまた今川義元のため人質に取られて、ぶツてりと肥え太ツた他日の大御所も貧乏世帶の遺繰で質草の種に痩せこけた餓鬼の時である、

それは偖措いて十兵衞光秀、内證は空大名の苦しい中に育ちながら、うまれ得たる天性の大志と智勇絶倫とは、なか〳〵東美濃の山塞に等しい明智城を無事に保つだけでは承知しない、さし當る稲葉山の大敵、その齋藤家と戰うて多年の怨恨を報ずるぐらゐでは面白くない、

あはれ家のために昔日この美濃一國の領主たりし祖先の土岐氏を再興し、我一身のためには百尺竿頭、機を覘うて天下に伸し出さうといふ勢ひ、勿論これは光秀ばかりでない、苟も當時の戰國に生れて武家武門と稱せらるゝものは、どうせ皆この類であるが、わけて光秀の如きは囊中の錐で、最も早くより其の志望が事■物々に現はれた人である、

その大志を抱いて光秀が十九の春、この戰國の血腥い中で、加之も一日の油斷すら出來ない敵を引き受けながら、人しれぬ戀とは偖あまりに暢氣らしい、時と境遇に照らして殆ど言語道斷、事實あるべからざる筈だが、恐るべし其戀の相手、寧ろ稲葉山の大敵よりも光秀の心を動かした不思議の力ある曲物は、名畫から脱け出でたる如き嬋娟窈窕として、いつしか明智の城下に潜んで居た、

明智光智に戀とは頗る配合が悪い、いかにも不似合のやうに聞えるが、これまた世に誤り傳へられた明智光秀を想像するがためで、實は天性の情に深い光秀なればこそ、血腥い戰國の當時に妻の手を取ツて流浪するだけの光秀なればこそ、別に人しれぬ落花流水の風情を備へて、いはゆる英雄の閑日月なるものを、たしかに持ツて居た人である、

この光秀に反して武田勝頼といへば、すぐに演劇淨瑠璃の八重垣姫を聯想して、ほツそりと色白に悠々たる長社衿、どれほど優しい美男かと思はれるが、事實は大に然らず、そも〳〵武田勝頼は智謀こそ父に劣れ、武勇は信玄以上の激烈なる猛將で、加之も身材は六尺以上に秀でた大兵肥満、十里の平地を行くに二頭の乘替馬を要し、十三の時は既に胸毛が生えて居たといふ一種異樣の發育をした恐ろしい荒男、その畫姿は厄病神の退治にこそなれ、館の姫に反魂香を炷かれて、名畫の力あるならばと、泣き口説かれるやうな色男でない、しかし勝頼といへば風采優美、いかにも情らしく聞えて、光秀といへば眉毛逆立ツた武者髯の沒趣味、いかにも蠻勇らしく思はれるのは、同じ姿を變へながら金襖の影に立つ花作りの簑作と違ひ、その簑の下に嚴めしい大具足を著て、つまり出處の惡い夕貌棚の此方より現はれたからである、この想像は單に世俗の文盲ばかりでなく、動もすれば歴史の端くれを覗いた人の頭腦にも先入して居るらしい、

ところで光秀の容貌、いかなる男かといへば、これまた當時の逆賊として後の世に賞翫されないから、その片影さへ認むべき木像も畫像もないが、四方へ流浪した時は到るところの諸侯に天晴れ一癖ある武士と見られて迎へられもし追はれもし、日向守となツて天下の諸將に聯りし時は瀧石に土岐源氏の末ぞと一際すぐれて目に立ちしといふ點より想像すれば、決して見苦しい男振でない、いはゆる戰國時代の武士として殆ど模範的の好丈夫に

近かッたらしい、その光秀が十九の春、猶更ら以て氏素性に恥づかしからぬ容貌と風采とを備へて居たものと思はれる、

加之も明智城の主人である、城らしい城でなくとも、その城の館様と稱へられ、たとひ内證は空大名の苦しい時にせよ、東美濃の可兒郡では正しく隨一の重い人として尊敬されて居る、つまり殿様で、その若殿様が、をり〳〵出られる時は、男女ともに道を讓ッて腰を屈めたに相違ない、

しかし後世の大名と領民とに於けるが如く、尊卑懸隔の甚だしくない當時で、萬事が質素簡略、乘物もなければ先を拂ふ同勢もない、わづかに一僕を召し連れるぐらゐが關の山で、一日、小澤山といふ野原より小鳥狩の歸途、ふと出逢ッた十六七歳の處女、目早く城主と知ッてか、俄に道を外して傍の樹影へ立ち寄ッたが、天の成せる美人、無論、この鄙にはあ

痴話口説の最も高尚に最も優等なるものなり、あまり天下太平の長きに過ぐれば却ッて國政に腐敗を生じ易く、あまり無事すぎた家内安全も實は考へざるべからず、

一人曰く、

我輩は今の妻と添うて以來こゝに七年、只もう有難く感謝の仕通しなり、先妻は我輩の貧を知りて我輩の爲人を知りて、物質上にのみ重きを置いて自己の虚榮を滿たし得ざるがため、殊更に口實を設けて殆ど出奔的に去りしが、今の妻は貧なるがため、寧ろ我輩の爲人を能く知り、一家の經濟、否、一家の貧乏に自ら任じて我輩に後顧の憂なからしむ、我輩この一事を以て妻に感謝する以外、妻に對する言論の資格なし、

一人曰く、

吾人の主義は我妻をして世間の所謂る世話女房たらしむるを欲せず、經濟の許すかぎ

り容貌を飾らしめ、及ぶかきり香粉を粧はしめ、出來得るかぎり若作りにして、只これ妻の美を失はざらむとす、妻を臺所の世帶道具と一般に心得、また下女扱ひと等しく亂髪弊衣にコキ使ふは、妻に對する殘酷よりも寧ろ良人たるもの丶不本意にして不愉快なり、朝夕その顏を見て生涯を同棲すべき妻は、たゞ一時その場だけの雇女にあらず、往來の擦れ違ひに瞥見する他人の女と異なりて、何人も一指を染め得ざる我占有物なり、さるを世間その他人ならざる我占有物に對し、その美を飾るに躊躇し若くは反對するものあり、加之も男子は女子の美を好む、何ぞ矛盾の甚だしきや、吾人は常に思ふ、妻たるもの丶第一條件は貞操なれど、妻は宜しく良人に對して、その容色を作ること、その愛敬を呈すること藝妓の如くなるべしと、老いて婆ア藝妓の如くなるは、若くして雇ひ婆アの如きよりも頗る可なり、たとひ貧なりとも女は貧に相應の

いかに絶世の美なりとも、たゞ野路に出逢うた十六七の小女郎一疋、まして戰國武士の一粒種に育てあげられた明智十兵衞光秀、たゞ一瞬の雲煙過眼に付し去るべき筈であるが、よく〳〵深い因緣のあッたものか、どうしても一たび目に入ッた其容姿が忘れられない、ふしぎに胸へ刻み込まれた何物かを削り取る事が出來ない、つまり光秀も十九の春こゝに始めて戀といふ不可思議の怪物に組み敷かれた結果である、よし組み敷かれないまでも、たしかに二歩三歩を押し戻された體である、しかし外には一日の油斷もならない稻葉山の大敵が、いつ何時に押し寄せて來るかも知れない時、また內には顏色にも出せぬ叔父の手前、その兵庫助光康が後見人として監督の嚴しいのみならず、家運次第に衰へて來て人しれぬ內證の苦しさ、祖先傳來の家來どもは半ば以上、あはれ鋤鍬を取ッて農兵となりながら此明智城を守るといふ、その慘憺たる中で

城主と立てらるゝ十兵衛光秀、うか〳〵寢言にも口へは出せない、穂に現はるゝ顏色にも出せず口にも出せず、まして手は出せないとすれば、猶更ら心に募る煩惱の種、まさか光秀ほどの男が今この場合に戀煩ひもすまいが、さし當ツて眼前に寄せ來る敵もなく現在に我城を乘ツ取られる危急存亡の間一髮でもないかぎり、流石に一時我を忘れて、ぼツとした事はないともいへない、ところが十日あまりの後、誰いふとなくぱツと風聞が立ツた、その風聞は幸ひ光秀の胸に苦しい戀よりも、まづ相手の美が光輝を放ツて、隱れもない人の耳目に聳えかけた、それも其の筈で、いはゞ都に遠い鄙の戰國時代、この明智在へ突然あれほどの美が天より降るか地より湧く外、なみ〳〵の人種にあるべき筈がない、いづこより流れ込んだか近ごろ城下に見馴れぬ絶世の美少女が、弟と覺しき十四五の美少年を連れて住んで居るといふ、その風評が一種異樣の疑團に包まれて城中へ聞え出した、

まだ年若き親なし子の光秀を後見して、この明智城を守る叔父の兵庫助光康、思はず眉を顰めながら、油斷大敵の折柄、ふしぎの奴等、兎も角も其の同胞を引き連れて來いと命じた、

城主の名目は光秀ながら、後見人の光康は正しく事實の大將で、我が所領内に身を置くもの、怪しい奴と見れば、鬼でも蛇でも召捕る權力がある、まして十六七の少女と十四五の小忰、たゞ一呼の下に忽ち城中へ引き上げさして、家來の詮議にかけず、光康が自ら調べ出した、

その時に障手を隔てながら、耳を欹てゝ居たのは十兵衛光秀である、

引き出されし同胞二人、風聞の取沙汰よりも、見れば猶更ら目に立ツて、揃ひも揃うた美

少女と美少年、明智の城中に時ならぬ色香を點じ出した、

いづこより流れ來りしか、ふしぎの奴と、光康みづから取調べて見ると、その姉は萬龜といふ名で十七歳、その弟は彌太郎といふ名で十五歳、氏は當國の齋藤一族と聞いて、兵庫助光康、おもはず大の眼を瞠ツた、加之も見れば見るほど同胞うち揃うて少しも驚かぬ體いよ〳〵以て不思議の美少女と美少年とである、

明智城の光康が俄に眼球を剝いたも道理、當國の齋藤一門といへば、正しく我を覘ふ稻葉山の齋藤、それがために斯く一日片時も油斷の出來ざる大敵である、

また身を釜中に置くが如き我城下へ來ツて、活殺自在の我眼前に斯く引き出されながら、少しも恐れず憚らず雙美の面を振り上げて、言葉さへ淀まず隱さず齋藤氏を名乘ツた大膽不敵さ、いかに戰國生育の氣風とはいへ、これは慥に天性非凡の同胞である、

それも其筈で、姉の萬龜は他日惟任日向守に内助の功ありし賢夫人お牧の方、また弟の彌太郎は他日明智家に隨一の名を取ツた齋藤内藏助利三で、織田信長が舌を卷いた稻葉一徹の女を妻として、春日の局と伊豆守立本入道の二子を生んだ父である、

しかし十七と十五の今この時は、つまり明智家に取ツて敵の片割れ、その同胞が何のために我城下へ流れ込んだか、現在の光康が目に映じた面貌にも年齢にも似合はぬ大膽不敵さは猶更ら怪しまれて、もしや敵の間者であるまいかと、睨まれた、後の世の太平に生れて月や花と育てられたとは違ひ、その時代には自然その時代の産物があるもので、戰國の當時には殆ど事實に疑はしいほどの事實が多い、現に近く甲州の武田信玄を刺し殺さむとして捕へられた刺客に村上義清が家老の女で八千代といふ十三の少女があツた、また今川義元の手許へ兒小姓となツて入り込んだ間者には、十四歳の國丸といふ怖しい奴があツた、

それを耳目に聞き及ぶ兵庫助光康、正しく敵の同性で眼前かくまで大膽に落著いた不思議の同胞二人、なか〳〵油斷が出來ない、うか〳〵すれば拷問に掛けても本音を絞り出さうといふ勢ひを現した、

ところが障子越しに耳を欹てゝ居たのは十兵衞光秀で、神ならぬ身に他日の深い因緣ありとは知る筈がない、つまり降ツて湧いた意外の驚愕、今の今まで束の間も忘れず我胸に忍ばせし戀の本尊を、或は此まゝ敵の間者として助ける事の出來ない場合となツた、

いかに堪へ難い戀なればとて、後見人たる叔父の光康が手前、我ために多年の忠節を守る家來どもの手前、まして祖先傳來の城地を覘ふ敵の片割に一雫たりとも情の露は注げない、もし今日の言葉でいへば、失戀も失戀、戀に捨てられた厭世的の新體詩を唸るやうな生やさしい失戀でなく、慘憺たる胸中の苦痛轉輾、その戀を我目前の拷問にかけて責め殺さねばならぬ失戀の極である、しかし十兵衞光秀、失戀の曉に狼狽へて瀧壺へ飛び込んだり鐵道往生でもして濟むやうな人間でないから、猶更ら以て苦しい、このところ法石の明智光秀も思はず溜息を吐いて、あはれ一個の小說的人物となツた、

ところがこの同胞、また更に口を揃へて不思議の一語を發した、それは外でもない、同胞二人は稻葉山と同じ齋藤を名乘れど、實は今の齋藤家に深き怨恨あるものゝ子ども、あはれ御味方の端に連なツて運命を俱にしたいといふ願意である、

この不思議の願意に就いて、この同胞二人の素性を語る前、大略まづ齋藤家の由來を語るの必要がある、

そも〳〵稻葉山の齋藤家なるものは、よほど面白い歷史を持ツて居る、

いづれ世の亂るゝ時は天下の大勢に伴はれて、いつも歷々の身分あるものよりは名もない

匹夫下郎に豪い奴が出る、わけて蜂の巣を突き破ッた如き戰國の當時、累代の武門は次第に衰へて、草叢の中より鎌首を持ち上げる奴の中に、この齋藤家もまた其一人で、音に聞えた道三入道秀龍は、始め京都の油賣で勘九郎といふ素町人、どんな事をしたか生れた土地にも居れず、流れ流れて美濃の國へ落ち込み、やはり外に取る業もなく油を賣ッて歩いたが、たゞの油賣でない、をりしも美濃半國の領主、つまり明智家の本家たる土岐頼藝の老臣永井豐後守に取り入ッて、うまく幸ひ武士の端くれに拾ひあげられ、松並新四郎と稱したが實は此奴、油賣にあるべからざる天性の大膽不敵で才智能辯で、わづか三年の後、土岐家の千石取となッた時、京都から美人を呼び寄せて頼藝に獻じ、果は内外一切を掌中に握ッて、最初に拾ひあげられた家老の永井と同性の縁を結び、永井藤左衛門秀元といふ三千石取になッた時、また竊に謀略を設けて自己の黨與を組み立て、竟に主君の土岐頼藝を追ひ出して齋藤山城守秀龍と名乘ッたが、この齋藤家といふのは濃州に於ける古來の名門で、始め土岐家を覘うた時には、その家老の永井を冒した如く、今また美濃一國を覘うて、血筋もない齋藤の氏を盜んだ奴である、

しかし他人の姓を偷む位は朝飯前の奴で、曩に土岐頼藝へ獻じた美人を其まゝ取り返して自己の妻にしたといふ傍若無人、言語道斷の振舞、けしからン太い奴だが、太い奴だけに味方を愛撫すること我子に等しく、敵を打つこと惡鬼羅刹の如しで、其ころ既に尾張で武名を擧げた織田信秀の一子、那古野城に居る上總介信長のため娘を懇望されて嫁に遣るほどの勢ひ、機會よくば天下も覘はむとするほどの道三入道となッた、

ところが道三入道、いかに亂世とはいへ、あまり善くない筋道で出世した惡業の返報ともいふべきか、その子の齋藤義龍がため竟に殺されて仕舞ッた、

或一説に斯ういふ事がある、この道三入道、曩に土岐頼藝へ獻じて後に我物とした例の美人が、案外のお土産御持參、既に孕んで居て、生れたのが嫡子の齋藤義龍、即ち信長に嫁した娘の兄に當るが、長ずるに從うて日根野備中守や武井肥後守などいふ土岐家の舊臣ども、これを内々そツと義龍に告げたから事が起ツた、つまり實父の仇で、そろ〳〵反抗の色を現はしかけたから道三入道、この義龍を廢嫡して次男の我が實子を立てむとしたが竟に義龍のため機先を制せられ不意を襲はれて殺されたとある、しかしこれは餘り小説めいた因果應報で信じられない、

加之も此説に依ると二代目の齋藤義龍は取も直さず土岐頼藝の子で、つまり父の仇を報じたのみか、その土岐家は明智家のため正しく本家であるから、同族相爭ふの事實は珍らしからぬ當時にせよ、他國の外敵に對する必要上、寧ろ同盟和睦すべき筈である、よし同盟が出來ないまでも、互に絶對の怨恨を含んで戰ふべき理由はない、

つまり以上の始末で、そも〳〵齋藤といふ氏は油賣の勘九郎に盜まれ、今は父を殺して自立した二代目の義龍に冒されて、根も葉も踏み荒されし跡に殘ツた涙の種が、即ち明智城に投じた同胞二人である、

その油賣奴が、美濃の七八分を斬り從へて道三入道秀龍と稱した時、この同胞の父は三河に近い國境で鄕士となツて居たのを、武力の勢ひに押し付けて系圖を奪ひ、僅の捨扶持を與へて物も言はれないやうにした業である、

のみならず、道三入道を殺して自立した其子の齋藤義龍が、この同胞を稲葉山の城中へ召し出さうとした、加之も姉の萬龜を妾とし、弟の彌太郎を小姓として、兩手に男色女色の

雙美を弄ばむとしたので、さらぬも系圖を奪はれ、姓氏を偷まれて、無念骨髄に徹した父は、流石に名門の末流とて、生きて恥を曝さむよりはと、家傳の一刀に腹を搖ツ切ツて憤死した、

その死する時、同胞二人を呼んで涙と共に以上の無念を語りし上、もはや今日この濃州一國は稲葉山の嵐に吹き下されて、いづこの草も木も枯れ果てし中に、たゞ可兒郡の明智家は稲葉山と最後の一戰あるべき筈、其時こそ、もし叶はずば堀の埋草ともなツて働けよ、力は足らずとも見苦しき振舞して明智の人々に笑はるゝなと、最後の白刃を片手に血の涙を注ぎし父の遺言、しみ〳〵身に沁みて來た同胞二人である、

懷中に入る窮鳥は獵夫も殺さずといふ諺、まして當時の武者氣質、かくと聞いた明智兵庫助光康、おもはず鬼のやうなる眼を濡らして、俄に同胞の手を取りつゝ、たしかに賴まれたぞ、この城中に心安かれ、今日より我を親と思へ、もし運に叶うて稲葉山を踏み潰さば、あはれ天下に名を得た婿を取らすぞよ、また弟も世に恥づかしからぬ武夫にするぞと慰めたが、神ならぬ身の何ぞ知らむ、不幸にして此城は稲葉山のために亡されしも、他日その婿殿は現在その身の甥で、加之も現在障子一重を隔てながら聞いて居るとは、人間の因緣ほど不思議なものはないのみならず、其の弟は果して世に恥づかしからぬ名を擧げた他日の齋藤内藏助利三とは、本人の彌太郎さへ十五の今は夢にも知らない、

また明智家の紋は桔梗で、齋藤家の紋所は撫子で、ともに露深き秋草の末を思へば、何とやら自然の風流と自然の因緣が纏はれて、さらに一種の趣味を加へられた心地がする、

叔父の光康は元來の義俠心と同情の涙に堪へずして我が懷中へ抱き入れたが、障子一重の耳を欹てゝ居た甥の光秀は、義俠心よりも同情の涙よりも、さらに人知れず心の奥深き底

へ、今や眼前に碎かれむとせし名玉を、そツと音なく無事に抱き入れた氣がして、いかな他日の英雄も戀といふ魔力に襲はれし十九の此時は、悲喜こも〳〵胸に迫ツた刹那の凡夫、思はず障子越に叔父を拜んだかも知れない、

偖いよ〳〵齋藤家の血脈たる姉の萬龜と弟の彌太郎とを其まゝ城中に止めて、いはゞ明智一家の身内に等しくした以上、强ち同胞のために急ぐでもないが、自然と稻葉山に對する覺悟も違ツて來た、つまり決戰の運命を早めた結果である、

また稻葉山の齋藤義龍は父を殺して自立するほどの傍若無人で、實は眼中この明智城を殆ど齒牙にかけて居ない、わざ〳〵押し寄せて踏み潰さずとも、捨てゝ置けば自滅するぐらゐに高を括ツて居た、その明智のために鼻毛を拔かれた器量の惡さで、自已の兩手に弄ばむとした雙美の名花を一時に奪はれた體となるから、もはや堪らない、嫉妬の武者腹に幾倍の暴威を揮ツて襲ひ來るべき筈である、

もし此時その勢ひで驀地に來られたとすれば、いかに心は剛なりとも戰は勇なりとも、固より兵力に於て十分一も足らない明智方の苦鬪難戰、雨と降る來る矢玉の中で互の血を啜りながら、戀も情もあるべき筈がない、あはれ一方の血路さへ開き得ずして、他日の惟任日向守も武門隨一の名を得た賢夫人も音に響いた齋藤內藏助利三も出來ない筈である、うち入る雜兵葉武者に屍を蹂み躙られたまゝで終ツたかも知れない、

ところが幸ひ、天この光秀と萬龜女の爲に暫時の無事を與へて、よく〳〵深い自然の因緣を繫いだものか、齋藤義龍が俄の病氣となツた、

のみならず、こゝに案外の天祐は尾州の織田信長、そろ〳〵頭を持ち上げて稻葉山を覘ひかけた一事である

前にも述べた如く、信長の妻は十六歳の時に娶ツた道三入道秀龍の娘で、つまり義龍の妹ながら、その義龍が父の道三を殺して自立したとすれば、信長たるもの、妻のため舅の仇を討たねばならぬといふ名目で、實は豫てより美濃に垂涎して居た野心こゝに時を得て、尾州の國境へ俄に砦を設けたから、病中の齋藤義龍、猶更ら明智城に向へなくなツた、互に顔は見ないが知らず識らず信長と光秀との關係、ふしきに自然の絲を引くが如く、既に此時より生じて居る、

織田方では東美濃の明智城を以て、約せずとも稲葉山に對する一の牽制策とし、また明智方では尾張の那古野城を以て、約せずとも稲葉山に對する牽制策として、雙方より互に無言の同盟を通はして居た理由で、後日この光秀が足利十三代の將軍を奉じて信長に投じ、信長また喜んで迎へた消息も、たしかに此時より孕んだらしい、

今にも襲ひ來らむとせし稲葉山の齋藤義龍が、俄に病んで鋒先を弛めしのみか、尾州の織田信長が舅のために仇を報ぜむとする名目の下に平生の野心を包んで、そろ〳〵稲葉山を覘ひかけたがため、こゝに最後の決戰を覺悟して居た明智城は、つまり思はぬ案外の助けを得た、

されば幸ひ、この機に乘じて逆寄に襲へばであるが、悲しい哉、當時の明智家は此方より進んで稲葉山を踏み潰すほどの武備も兵力もない、たゞ來るを待ち受けて運を天に任さうといふだけが關の山、實は後世に遺すだけの華々しき一戰を試みて明智家の終焉を告げたいといふ、あはれ果敢なき時である、

しかし尾州の織田家が、いよ〳〵國境を越えて旗を稲葉山の城下に進めたと聞けば、逆寄せの力に足らない明智家も指を啣へて見物しては居ない、血煙を立てゝ驀地に襲ひ込むべ

き筈ながら偖この時の織田信長、また兵力の手薄い若輩で、迚もそれほどの勢ひもない以上、こゝ暫時は三方より無事に睨み合の狀態となツて、明智方では自然に小康を得た結果である、

ところで、安心して油斷も出來ないが、また急に慌てゝ馬武具の音をさすにも及ばない明智城中、後見人たる叔父の光康も一息を入れて、をり〳〵忍びながら近き城外の花を見に行くといふ體、主人十兵衞光秀と二人の從弟もろとも團欒して、をり〳〵浮世談話の笑ひ聲さへ漏るゝといふ體で、例の同胞も人しれず胸を撫で下して、おもはず片頰に微笑を含んだが、偖この微笑は元來どういふ微笑でありしか、わけて花の顏に露を含める如き姉の微笑は、よほど研究すべき微笑である、

われ〳〵同胞のため猶更ら敵の嫉妬に暴威を增して、恩ある明智方の最後を早めたかと思うた、その心の苦しさが自然に解けた微笑であるか、但しは一年なりとも同胞の年を重ねて、まさかの時の用に立つべき曉を喜んだ微笑であるか、乃至また其間の無事に何をか嬉しき事のあれかしと竊に祈る微笑であるか、兎も角この微笑は十七の蕾を破りかけた萬龜女の微笑ばかりでない、正しく十九の光秀が片頰にも現はれた、ところが弟の彌太郎十五歳、描ける如き美少年の面に浮べた微笑は、天性の大膽不敵より湧き出た怖ろしい微笑で必定、敵の矢玉に死すべき筈の生命と覺悟した、その生命が案外こゝに暫し生き伸びたを幸ひ、身を稻葉山の城中に忍び入ツて敵將義龍の病に伏せる寢首を搔かむとした微笑である、

血腥い風が今にも吹き寄せるかと覺悟を極めて居た明智城に、案外の春風そよ〳〵と花の

梢を誘ふ心地がして、こゝに暫時は眼前の無事に武者眼を細くしながら、浮世談話の笑ひ聲さへ漏れるといふ體、油斷するでもないが自然の人情、次第に殺氣が失せて何とやら和いで來た、

わけて此時の十兵衛光秀は、人しれぬ心の底に戀といふものを忍ばせて居た光秀で、さし當る眼前に寄せ來る敵のない以上、流石に十九の青春、うたゝ堪へ難い情のため、加之も其戀は遠からぬ我手許で、花の如き艶麗、朝夕の近き色香、もし折らば折るに任せまいものでもないとすれば、危いかな、實に紙一枚の懸隔である、

また萬龜女の身に取ツては、いづこの里にも寄る邊なき同胞が、今この明智城に扶けられて、父の遺言といひ、行末の依頼といひ、現在の恩義といひ、どうしても十兵衛光秀を見る目の心が、おのづから違ツて來る理由である、まして此萬龜女は天成の賢婦で女丈夫の質を備へた女で、その相手の光秀は元來の大志と英傑の質とを備へた男で、世間普通の男女たゞの十九と十七の外、いつしか互の心に許し合うたところがありとすれば、猶更ら以て此まゝ無縁の他人では濟まない、實は矢玉の雨の晴間を幸ひ、音なき月下氷人が内々そツと忍び來て、さア今の内ぢやと何をか頻りに催促して居たらしい、ところが弟の彌太郎だしぬけの不意に明智城を脱け出して行方も知れず消え失せた、後に一片の遺書が殘ツて居る、宛名は光康と光秀の叔父甥で、いぢらしく姉の身を託し、くれ〴〵も今までの恩を謝した上、自己は用なき一身を抛ツて稲葉山の敵中に忍び込み、お土産には齋藤義龍の寢首を搔いて立歸るといふ文意である、つまり寸鐵一氣の刺客である、

兵庫助光康、この文意を見るや否、おもはず大音を揚けて、それ者ども追ツかけよ、飛んで火に入る夏蟲の諺、みす〳〵彌太郎を敵の手に殺すなと、十餘人の家來に道を分けて追

はしめたが、どこを如何して走ッたか、さらに影さへ見えない、十兵衛光秀も俄の驚愕、あはれ志は剛なりとも、まだ物馴れぬ十五の小冠者ぞ、むざ〳〵敵の餌食に遣ッたりと、家來どもの後から馬に鞭ッて四五里の前路まで探しぬいたが、やはり不思議に影も姿も足痕も殘らない、

こゝに姉の萬龜女、いかにと見れば、少しも驚かない、天の成せる花の顏いよ〳〵冴えて張り切る目許に露は含みながら、少しも慌てない、靜に光康と光秀の前に出でて、身のほど知らぬ弟なれど、さほどまでに思ひ立ちて出でし上は、あれが心のまゝに許し給へといふ、その言葉も淀まず言ひ切ッて雄々しさ、ことし十七の娘にあるまじき大膽さ、いかに氣强き戰國生育ながら、なるほど、あの弟の姉に出來ただけの女である、

大前髪に振袖姿の似合ひさうな彌太郎が、十五歳の身を以て射る矢の如き勢ひに明智城を脫け出し、稻葉山に忍び込んで齋藤義龍の寢首を搔かうといふ、いかにも志は年齡にも顏にもあるまじき天晴れ不敵の勇ながら、つまり年少客氣の穉氣を帶びた勇で、當時この濃州を七八分まで各み込んだ大敵、果して十五の小童に寢首を取らるべきや、加之も日夜の油斷なき戰國の眞ッ最中、猶更ら守備嚴重の時である、

ところが彌太郎また他日の齋藤內藏助利三である、案外の深謀祕策、驀地に稻葉山へは飛び込まない、其ころ敵の旗下ながら常に賓客の禮を以て重んぜらるゝ濃州の一名物、輕部の城主稻葉良通の城下を彷徨いた、つまり疑はれて引ッ捕へらるゝが目的で、捕へられた以上、曩に義龍より執心せられし我身を幸ひ、稻葉良通の手から獻じられたいためで、獻じられて近づいた曉は、おのれ、寸隙を覘ひ刺し違へて俱死になるか、運よくば寢首を搔

いて出奔するかといふ、恐ろしい謀策である、

しかし輕部の城主、この稻葉良通といふは世に唄はれし稻葉一徹で、天下を殆ど我物とした他日の織田右大臣信長さへ、内心これを恐るゝの餘り、茶室に招いて刺し殺さむとしたが、その任に當りし大剛の勇士どもが手を出す事が出來ず、信長また舌を卷いて驚いたといふ文武兩道の逸物、今こそ暫し目を睡ツて齋藤義龍の旗下ながら、實は心の底に大局の自信を抱いた人で、義龍が執心の美少年を生捕ツて當座の意を迎へるやうな賤劣の人物でない、

加之も彌太郎が目的を達し得ずして、そのまゝ輕部の城中に引き止められたのは、彌太郎のため實に禍を轉じて福とした意外の幸運で、この一徹に祕謀を看破され、この一徹に無謀を說諭され、この一徹に天下の大局を敎へられ、この一徹に文武の道を仕込まれ、この一徹に行末を見込まれて、竟に後日の内藏助利三となツたのみか、この一徹が掌中の珠として育てあげた一人娘を與へられ、その婿となツて世に名高い春日局を産んだ父と母とが出來た理由で、流れを傳ひ水上を遡れば、なるほど瓜の蔓に茄子は生らない、

それは偖措いて明智の城中、可惜ら少年を敵の餌食に投じた體で、兵庫助光康も十兵衞光秀も、おもはず眉を顰めたが、現在の姉たる萬龜女、夜こそ袖に涙の雨は降れ、冴え渡る花の顏に人々の手前、少しも未練らしい露を含まない、女でこそあれ、十七でこそあれ、今にも敵の押し寄せしと聞かば、せめての思ひ出に味方の血潮を拭ひまゐらせむ、兵糧の炊場にも召使ひ給へ、狼狽へて駈け出せし弟の分まで働きたしといふ、その健氣さ、その雄々しさ、戰國に生れし武者氣質の光康としては、音高く膝を打ツて歎稱せざるを得ない、わけて十兵衞光秀としては、いかに此萬龜女が絕世の才色兩全に見えたか、いかに此萬龜

女が行末の我妻として恥づかしからぬ賢婦に見えたか、どれほどの女丈夫に見えたか、たとひ太平に連れ添ふ夫婦の縁はなくとも、この明智城中に枕を竝べて討死でもすれば、男として女に對する生涯の希望、この上なしと思ひ込んだに相違ない、

同じ竝べる枕でも戰國の戀は格別、敵の矢玉を浴びて城を枕の討死が本望とは恐ろしい、なか〳〵今日の情死どころでない、

光秀と萬龜女とが夫婦となるに就いては、全體いつの間に、どうして、どういふ工合の出來合でありしか、それを委しく艶ッぽく媚めいて小説的に語るの必要はない、たゞ人しれず、互の胸に持ッて居た戀と戀とが自然の縁に繫がれて、加之も其實行に差支のない矢玉の雨の晴間を幸ひ、首尾よく出來たものと見るより外はない、

つまり當時に於ける自由結婚で、晴れがましい婚禮沙汰は無かッたらしい、たとひ叔父の光康が其式を擧げさしてやりたかッたにせよ、時と場合と敵に對する家來どもの手前、心に許しながらも偖、さうは爲せられない折柄である、

ところが此自由結婚が、いかにも立派な自由結婚で、實に伉麗その人を得合ッたのみならず、生涯連れ添ふべき妻を一時の戰略上より犧牲物として遣り取りした戰國虎狼の人情界には、最も神聖なる眞實の愛と愛とに依ッて出來たものである、

さればこそ、明智城沒落の曉、やう〳〵一條の血路を開いて出奔せし以來六年の間、四方に漂流しながら艱苦を俱にして互に手を放さず、幾度か生死の境を出入したといふ、當時の荒々しき武者中には實に珍らしい特殊の美談を遺した夫妻一對である、この美談を遺すべき夫婦一對も、その當時は流石に何とやら時勢と境遇とを憚ッて、たゞ叔父の目に許されたといふだけの事、實は他の手前まで忍ぶ戀路に等しい逢ふ瀨で居たが、今にも襲ひ來

るかと思うた稲葉山の大敵が尾州の織田家に支へられた上、齋藤義龍の病疾いよ〳〵重くなりしがため、案外の無事が長く續いて、いつしか三年の春秋を夢の間に送ッた、卽ち十兵衞光秀は二十二歳、萬龜女は十九歳、

その歳の秋、肌に涼風そよと吹いて梢の木葉も黃ばみかゝりし十月中旬、木枯の音と思ひの外、曉の霜に旗さし物を飜しながら、だしぬけの不意に稲葉山の敵が襲うて來た、豫ての覺悟なれど、すはや一期の大事、明智家の運命、今この時に迫ッた光秀の働き、萬龜女の振舞、これが夫婦もろとも他日の世に出でて天下に唄はるべき第一著歩である、

目にも見ゆる秋の風、美濃路の木枯を誘うて、いつしか山々の瘦せ行く心地、谷々の水さへ細く落ちて、一入もの〻哀れを增す朝夕の景色、戀なれば猶更ら燈火いとゞ靜閑なる夜の睦言、しみ〴〵身に沁みて忘られぬ時である、

その明智城の甍に置く霜白く、殘んの燈火いまだ消えやらぬ曉の夢を破ッて、俄に聞ゆる人馬の物音、すはや敵軍押し寄せたりとの叫喚、頃しも時は弘治二年の十月二十一日、

いふまでもなく敵は固より稲葉山ながら、尾州の織田家が國境まで覘ひ寄る折柄、わけて病中の齋藤義龍、本城をあけて自ら來るべき筈なし、さては部將の一人、おのれ何物にせよ、こざんなれ梵天八幡、我人種のあらむかぎり、我息の根の續かむかぎり、矢玉の雨に我この城の瓦一枚なりとも無事に殘る以上は、八十氏川の流を赤に染めて今生の思ひ出心殘らぬ最期の一戰を試みむといふ勢ひ、つまり明智家の存亡興廢である、

加之も主從こゝに僅に五百餘の明智城、わけて半ば以上は農兵となりつゝ、あはれ鍬鋤を取ッて居たといふ體であるから、いはゞ兵力に於て一城を保つべき數でないが、流行に多

年の名を得た武門の名流、外觀よりは思ひの外の要害堅固で、まだ人しれぬ武具も兵糧も案外に整うて居たのみか、第一その家來は百姓しながらも他家に走らず今日まで苦節を守ツて來た兵ども、まして主從一期の大切と思ひ切ツたる勢ひ、なか〳〵凄まじい、殆ど死物狂ひの面魂で、天魔破旬なりとも引き受ける覺悟を極めて、いざ來いとばかりに待ち受けた、

采配とる奴の名は知らず、人馬の數も知らねども、目にあまる敵の大軍、はや城の間近に二段武者の陣を敷きながら、さて急には迫らない、また挑戰の矢玉も發しない、俄に物音を靜めて、たゞ取り圍んだまゝ齋藤家の旗印を空に飜した體、つまり一息に蹈み潰すべき勢ひを示して、降參すれば今のうちぞと、高を括ツた備へ立、もとより呑んで來た奴である、

かくと見るや否、事實の大將たる兵庫助光康、半白の頭に兜の眉廂深く武者眼を光らして、これぞ土岐源氏の嫡流たる明智家の存亡興廢、弓矢神も照覽あれ、たとひ皮は裂け肉は飛び骨は碎けて粉になるまでも、やはか尋常の戰ひ振で置くべきか、今に見よと睨みながら十兵衞いづこにある、十兵衞、十兵衞と大音聲に呼んだ、

光秀生年こゝに二十二歳、紺絲の腹卷に頭形の兜、土岐源氏傳來の太刀を横たへ、手馴れし十文字の槍を携へながら、聲に應じ草摺を鳴らして出でむとする背後より、花恥づかしき十九の萬龜女、總角の絲を取り直しつゝ、天性いかに雄々しき女なりとも今生これが訣別の良人ぞと、おもはず目に持つ涙の雫を拭うて、天晴れ武者振との一言、光秀の腸へ何と徹へたか、木でも石でもない光秀、おもはず振り返りながら、互に見合はす目と目には三年越の赤繩これが今生の訣別、豫て期したる事なれど、あはれ流石に露の雫が宿ツて

居た、つまり演劇淨瑠璃の十次郎と初菊とは、この時こゝで父母が既に如才なく遣ッて仕舞うた、

おもひ切ッたる鎧の袖、行方しれずなりにけり、ではなく、正しく叔父の聲に呼ばれて、その座に走せ出た光秀と知ッて居ても、いざ戰ひ酣となれば、もはや再び顏も見られず言葉も交されぬ筈、同じ城中ながら別れ〳〵の運命と覺悟を極めた萬龜女、猶更ら天性を發揮して、振袖の女々しい初菊でない、契りし我良人の後姿を見送るや否、嵐に揉まれし名花一輪、身を飜して自己が居室に駈け込み、まさかの時と豫てより弟の彌太郎に當てられた卯の花縅の腹卷を幸ひ、取ッて身を固め、わざと長なす黑髮を兜がはりに振り亂して赤き絹に雪の額を幾重か卷き占め、志津三郎の薙刀を小脇に抱へながら、いかに生れ付いての大膽ぞ、睡るが如く靜に歩み出た風情、凛々しく雄々しき上に天の生せる美を添へて物凄く、畫に描いたやうな一個の女武者が出來た、

この描ける如き女武者が、しづ〳〵と歩み出て、どこへ行くかと思へば、今しも叔父甥が打ッて出でむとする前に跪きながら、萬龜が生涯の願ひ、これ今生の思ひ出、當城の主人明智十兵衞光秀が妻と名乘ッて死にたいとの希望である、

光秀、はッと振り返るより早く叔父の光康、大音聲に呼ばはッた、齋藤家の息女を今日只今あらためて十兵衞光秀の正室に迎へたぞ、嫁御寮これへ參られよと手を取ッて引かれた時の萬龜女、もはや生きて現世に思ひ置く事さらになし、

はや內外の人目に立ちて、後見人たる叔父の光康にも、それと心に許されては居るものゝ流石まだ晴れての夫婦でない、やはり忍ぶ戀路の遣る瀨なさで、たま〳〵の睦言に逢ふ夜の短きを歎ち、をり〳〵の愚癡に曉け行く鷄の音を恨んだ事もあッたが、三年越の今日、

いよ〳〵こゝに明智城の危急存亡となツて、生死の間一髪に平生の本望を達し、めでたく十兵衞光秀の正室と名乘り得た萬龜女の嬉しさ、實に際どい祝言である、

固より四海波の靜なる祝言でなく、友白髪の末まで契るべき筈の身が、さし當る眼前に血腥い大敵を控へて、今にも降り來る矢玉の雨の只一瞬、銚子盃の用意もなく人馬の立騒ぐ中で、いはゞ城を枕に討死を覺悟の祝言、いかに動せぬ天資英邁の光秀でも二十二の秋、いかに凛々しく雄々しき萬龜女でも花に露持つ十九の色香、互の口にこそ出さないが、うすき此世の赤繩を結ぶ間もなく、いざ亂軍となれば別れ〳〵に顔も見られず姿も添はれず、せめて冥途の道を遠く伴ひ行かむとの哀れさ、はかなき夫婦の身の上である、しかし今のこの期に及んで女々しき光秀でない、元來また女々しき振舞の出來る場合でもない、おもはず武者振ひしながら、叔父の前へ動き出でて、さす敵の泥脛に堀際を蹈み荒されむよりは、十兵衞こゝに三百の死物狂ひを提げて眞一文字に駈け出し、稻葉山の荒膽、どれほどの體か、一當あてゝ御覽に入れたいと言ひ出した、つまり當時の光秀まだ血氣の若武者である、

叔父の光康は兜首を横に振ツて微笑を浮べながら、いや行末大切の身を持ツた十兵衞これに留守せよ、もはや六十に近い老耄の我こそ討ツて出づるぞ、萬が一の事あらうとも、いきて再び春の還らぬ枯木が何の惜しかるべき、自然の天命さへ老いたるものは先んじて若きものゝ殘る道理、無益の前後を爭ふなと、この古兵なか〳〵承知しない、はや武者牀几の腰を立ちかけた、

光秀、かくと見るや否、その草摺を確と捉へて放さない、こは何事を仰せらるゝぞ、早く父母を失うて叔父とは申せ實の親の恩まで荷うた十兵衞、をめ〳〵老の御身を働かして片

時なりとも無事を保たるべきや、もし御意に叶はずば腹かッ切ッて犬死するまでの事と、聊か怨恨の顏色を現して詰め掛けた、

折しも降參を待ッて居た敵軍、もはや助命の時刻は過ぎたりとの勢ひで、俄に潮の如く大地を食んで押し寄せ來ッた鬨の聲、どッと聞えた、すはやと等しく座を立ちし叔父甥、その前に片膝立てゝ思はず振り向いた萬龜女、武者氣質に坐れた悽慘の極と絶世の美人に生れた艶麗の極とを取り合はせた一幅の畫圖である、

衆寡敵せずといふ語は、たゞ單に數字の上より出た比較的の言葉のみでない、この一語の中には古來幾何の英雄を無意味に葬り去ッた悲慘の極で、いふに言はれぬ遺憾の涙痕を含んで居る、つまり力の上に於ても業の上に於ても、戰鬪は正しく勝ッて居ながら、悲しい哉、時日と分量とのために制せられて、みすゝ無念の最期を遂げるといふ結果である、

稻葉山の大敵に押し寄せられた明智城も、またこの衆寡の上より打算せられて、現在の戰鬪は確乎に一を以て十に當りながら、奈何せむ際限ある城中の力と業とは人種を盡して討死するより外に道なく、際限なき城外の敵は次第に人種を增して、死せども〳〵盡きる時がない、

みる〳〵うちに敵は雲霞の如く後詰の兵力を增して來て、みる〳〵うちに味方は心細くも朝露の消え行く狀態、もはや戰鬪もするだけの戰鬪を遺憾なく思ふ存分に仕遂げたりといふ體、いはゞ人力を盡し切ッて、只これ自然の命數たる天を俟つばかりの最後となる、

これを當時戰國の武者氣質から見れば、凡そ武門武士として人にも恥ぢず世にも愧ぢず今生に思ひ置く事さらに無しといふ、自信の强い立派な成行で、あはれに勇ましく潔い落城

の間際である、

さればこそ、兵庫助光康も寧ろ心地よげに數個所の手疵を負うて、六十に近い古兵、あはれ脛も手足も利かぬ身を、これぞ冥途の語り草、明智家累代の祖先へ對して天晴れ誇るに足るべき我が面目ぞと、甥の十兵衛光秀も二人の我子も今や敵に向うて振り返る寸暇のないを幸ひ、若き者どもの見ぬ間に皺腹を搔ッ切ッて、がばと伏した間一髪、ぱッと城の搦手より黑煙が舞ひ上ッた、いふまでもなく忍び廻ッた敵のかけた燒討の火炎である、兜も振り失ひ鎧の袖も草摺も破れて、手馴れし十文字の槍まで突き折ッた苦戰の十兵衛光秀。なほも前なる敵に對うて荒れ出さむとする折しも、背後より吹き下す黑煙を頭上に浴びて、はッと思はず振り返れば、殘んの雜兵どもは俄に狼狽へ騷ぐも道理こそ、もはや搦手は火となッて、さらぬも心がゝりの叔父は既に屍を横たへて居た、

あゝ萬事こゝに休す、まして今年二十二歳、いまだ大器とならざる血氣の光秀、今この期に及んで何かを躊躇すべき、外に分別の出づる筈がない、たゞ敵軍に亂入して思ふまゝの斬死するのみである、

ところが光秀、おくれたるにあらず、また今更の未練でもないが、その斬死の前に、せめて一目なりとも、ちらと見たいものがある、嘸や彼も我と同じ心、わけて女の身いかにせしぞ、萬一の事なきか、どこに居るやと、折れたる槍を杖ついて大息を吐きながら、血眼に四方を見渡した、

思ひもよらぬ搦手より吹き下す黑煙に頭上を包まれ、潮の如く押し寄せし追手の敵に眼前の一の木戸を踏み破られ、加之も叔父の光康は數個所の深疵に皺腹を搔ッ切ッて、あはれ城外に鋤鍬を取りながら今日まで去らず放れず隨き來ッた譜代の者どもは、いづれも枕

を竝べて討死の眞ッ只中に、大童となッて折れたる槍を杖ついた十兵衞光秀、當年二十二歳の美丈夫、いかに勇ましく健氣なる體でありしか、わけて今生の最期に血眼を瞠ッて、戀や戀、三年越に情の露の一雫、弓矢八幡も照覽あれ、おくれたる未練にあらず、いづれ行く途、死なば諸共と例の萬龜女を四方に求めた風情、もし名畫の筆に上れば、實に悽婉を極めし好畫題である、

されど前面より鬨を作ッて競ひ來る敵の勢ひ、どッと吹き下す背後の黑煙よりも激しく渦卷いて、この光秀に萬龜女の姿を一目、ちらと探し見るだけの遑も與へない、

もはや事こゝに終れりと、杖づける槍を投げ捨つるや否、これぞ最後の活動、重代の太刀を拔いて眞ッ向に振りかざし、群る敵中へ驀地に駈け入らむとする一刹那、いづこよりか簑笠を著けて走せ來りしもの、仆るゝ如く飛び付いて光秀を抱き止めた、はッと思はず振り返ッて見れば、その簑に身を包んで被れる笠の中は、あはれ眞白の面を淺痍の血潮に染めた萬龜女である、流石の光秀、我を忘れて抱き返し抱き占めながら、まだ死なざりしかといへば、さらに他の事を言はない、たゞ落ち給へとばかり、はや既に光秀が鎧の腹帶を解きかけたも道理こそ、我身に纏ふ外また別に一人分の簑笠を用意して來た、

年は十九ながら、たゞの十九でない、身は女ながら、たゞの女でない、殆ど古今の例を破ッて抽ん出た元來の女丈夫も、はや落城と見るや否、手早く簑笠を取り出して、敵の目に付く花の姿を祕し、また思ふ戀人にも著せて、餘儀なく城中に驅り入れられた百姓の如く粧ひつゝ諸共に落ち伸びむといふ當意卽妙、たゞ空しく泣いて狼狽へて犬死するために良人を探し廻ッた萬龜女でない、かゝる間一髮の危急中にも、眠るが如く落著いた他日の器は出來て居たらしい、

なれど當時の光秀、却ツて他日の光秀でない、寧ろ血氣の死物狂ひに近き若武者で、親とも頼む叔父を殺し其子の從弟に當る二人まで見失うた十兵衞一人、をめ〳〵生きて何處の里に身を置くぞ、おのれの面を一目と思うたは我が過誤、そこ退けと蹴飛ばされて、脚に纏うた萬龜女、さらば此まゝ蹈み殺し給へと叫んだ、

偖かうなると女は強い、男よりも意地惡く死太い、いはゞ殆ど自棄である、たゞの女さへ捨鉢の自棄になられては野郎殿、迚も始末に終へない、わけて萬龜女の如く念力の怖しい女に脛を纏ひ付かれた光秀、敵に對うて馳せ出す事も出來ず、さりとて踏み殺されもせず進退こゝに谷ツて立往生の體となツた、

しかし立往生のまゝ敵の的となツて斃れるやうな光秀でない、また抱き止めた以上、をめ〳〵手放して敵の餌食にするやうな萬龜女でない、

さうかうする內に背後より火の手は渦を卷いて頭上に被る、前面より敵は鬨を作ツて大浪の如く押し寄せる、もはや討死するには華々しい討死の機會もないほどに迫ツて來た、この瞬間に於ける愛情の力は、この眼前に於ける無用の犬死を飜さして、今や將に燒け落ちむとする搦手の黑煙を潛りながら、幸ひ勝ち誇りし敵の目には城下の百姓が兵糧炊にでも驅り入れられたかと思はれる簑笠の二人が、生命の際を互に助け扶けられて、やう〳〵危い中を無事に落ち伸びた、

これが互に手を取り交した戰國の落人で、なか〳〵芒尾花の露に濡れるぐらゐの生優しい落人でない、いはゆる九死一生の血路を開いて出たものゝ惟任日向守の運命を開くには、なほ六年の歲月を四方に漂浪して、あらゆる艱難辛苦に堪へねばならない、

つまり交通不便の極と敵地關門の危き間を四方に流れ歩いた六年間は、一時の生命を捨鉢

に明智の城を免れ出たよりも、寧ろ歳月の長いだけに猶更ら人しれぬ苦痛の多かッた筈である、

しかし此六年間に戰國武士中の異彩を放ちし他日の光秀は兎も角、尾羽うち枯らした素浪人の十兵衞光秀には、いよ〳〵以て良人を扶け良人を勵まし良人を大成した妻女の力を認めねばならない、

以上は美濃の明智城に於ける明智光秀で、これから六年間四方を流浪した光秀と、越前の朝倉義景に寄食して一向宗門徒を討ッた光秀と、足利十五代の義昭將軍に策を獻じて織田信長に倚らしめた光秀と、その信長に客將たりし光秀と、竟に本能寺を襲ひ山崎に敗れし光秀とは、世間に知れ渡ッた光秀で、わざ〳〵語るにも及ぶまい、たゞ其の最後が小栗栖の竹槍で死んだか、或は名を變へて生きて居たかといふ光秀は、他日また別に改めて語る時期を待つとする、

今昔の感

今昔の感も、今昔の今と昔、あまりに遠く隔絶し過ぎて、その感の頗る薄き感あり、甚だしきは實際に於て全然その感なきに至る、蓋し今昔の感といふ文字は多く詩的の用語なり、我この今昔を感を最も適切なる事實の上に感ぜしは、我國に於ける今日の新聞紙と慶應年間に發行せる新聞紙とを比較して、全く今昔の感に打たれたり、

我國の新聞は、元治元年四月、岸田吟香と本間潛藏の横濱に發行せしもの、題して單に、「新聞紙」といふ、これを嚆矢とすべきも、我いまだ其の「新聞紙」を見たる事なし、たゞ我の所有せるは慶應四年の「中外新聞」なるもの半紙二つ折を五六枚に綴ぢて、荒き木版

「の手摺なり、月に一回の發行、その一冊全文を掲ぐ、以て今日の新聞記事と對照すべし、誰か今昔の感に堪へざらむ、

中外新聞第九號　　慶應四年三月二十八日

夫れ新聞紙の起原を尋ねるに、佛蘭西國にては、寛永年中レノウドといふ人、始めて新聞雜說を集め、ガゼツト、ド、フランスと名づけて之を板行し、英吉利にては、寛文三年ロゼル、レストランジといふ人、ゼネラルインホルメーションと名づけて始めて開板せしと云ふ、扨近代に至りては西洋諸國は言ふに及ばず、近くは唐國の上海、香港、印度のシンガポール、セイロン等を初め、サントウヰス島の如き小國に至るまで新聞紙局あらざる國無し、新聞紙は人の智見を廣め、士農工商各其の職務に付いて益有る事は、衆人の知る所なれば論を待たず、然れども其の行はるゝと行はれざるとは、一に國風の異同に因り、一は新聞紙の體裁に因る、國人新聞を好むと雖も、記す所悉く虛妄なるか、或は陳腐なるときは、看る人倦みて之を廢す、又著述の體裁は宜しけれども、忌諱多くして朝政に關かる事を書記するを禁ぜられ、或は實事を記すにも芝居狂言の文句の如く、地名人名を取替へて傳ふるが如きは、亦人の喜ばざる所なり、英吉利人は殊に新聞を好み、且つ其の國法書物の著述に禁制無し、故に新聞紙の內に國政を批判し役人を誹る等の事あれども、少しもこれを咎むる事無く、却ツて廷議の參考となす、是故に英吉利國は、新聞紙の盛なる事世界第一たり、數年前新聞紙局の數、ロンドン府に百六十個處、其の他諸州に二百三十二個處

愛蘭に百十七個處、蘇格蘭に九十四個處ありしと云ふ、今は是にも倍す可し、ロンドンに出づる新聞紙の最も多く行はるゝ者、一度に七千萬枚を摺り出すに至る、扨横濱にて英人の新聞紙を摺り始めしは、去る文久三年以來にして、今は其の家三軒あり、又西洋文を飜譯せし者二三種既に出づと雖も、いづれも外國人の手に出でたる者なれば、日本の新聞紙とは言ひ難し、吾が江戸の開成所にて、七八個年前出版せし事あれども、其の頃は看る人も少く、且つ故ありて程無く中絶せり、然るに此度吾等の社中にて、海内海外の事を雜へ記し出板して公行せしに、市中は更なり近國にも速に弘まりて、僅に一ケ月の間、既に購求する人千五百名に及べり、世人新聞を好むの時勢これに依て察すべく、文運の開けたるも亦推して知るべし、近頃京都にては、太政官日誌といふ書板行ありて世に行はる、然れども是は朝廷の公告なれば、吾等が會社の著述を以て竊に比較せむ事恐れ有り、されば民間に行はるゝ日本新聞紙の濫觴は、此中外新聞なりと言はむも亦過當には非ざるべき歟、

○

大樹公上野の岡に寺ごもりしたまふよし
うけたまはりければ
あはれ君かきこもります此うへの世の中いかになりか行くらむ

井上文雄

述懷

作者不詳

自古英雄多數奇、胡爲大樹棄連枝、斷腸三顧許身日、揮涙南柯入夢時、萬死報恩志未遂、半途墜業恨何涯、暗知氣運推移去、月黑橋頭啼子規、或云會津侯之

作　伊達自得　紀藩

題しらず

み吉野の雲井のさくら此春はいかなるいろにさきにほふらむ
風をのみうらむもあやな櫻花さきすさびてはわれとちるなり

向島の櫻の枝にゆひつけゝる歌　よみ人しらす

都にて思ひしよりも面白し隅田川原の花の夕ばえ

○

此頃英吉利コンシュルの襲はれし風説盛に行はれし故、第六號に其の事を記せし後、尚其の虚實を探索せしに、全く浮説にて實事には非ず、依てこゝに斷り置く、

西郷吉之助駿府より直に上京せし由、來月歸著すへし

○陸軍局布告の文

官軍の内、筒拂ひこれ有るべき由に付、萬一砲聲相聞え候とも、決して動揺いたすまじく候、此段向々へ不洩様相達せらるべく候、

三月

○喧嘩はめツたに始むべからずといふ話

兒童教導書一則を譯出す

いづれの處にか有りけむ、父子同居して二人の子至ツてむつまじく暮らす者ありけり、父存生の間は、絶えて物言ひも無かりしに、父死せし時、遺物の事に

よりて不圖兄弟喧嘩を始めたり、然るに思ひがけなく、其の夜盗賊入りて、右遺物の品々を奪ひ去れり、是において肝心の喧嘩の種は最早無くなりたるに、喧嘩は矢張止まず、終に一生涯中悪しく暮せしとぞ、

先生曰く、一時一物の爲に、永久莫大の禍を引き出す事少からず、古今大小の事皆然り、因て戒む、小兒等かまへてめツたに喧嘩を始むる事なかれ、

○

京都より蒸氣船三艘、横濱に到著す、大原侍從上陸ありし由、去る二十五日横濱より申し越したり、

英漢新聞紙に曰く、唐國より各國へ條約取結びの爲に、使臣を差遣はすべき旨評決し、今年五月、はじめて亞墨利加合衆國へ使節を遣はすよし、

○横濱新報告

二十四日二十五日兩日に、當地に於て勅使大原殿、各國公使を尋問致され候、東久世前少將殿、外一人横濱奉行に任ぜられ、外士官三人と共に佐賀の蒸氣船に乘じ、七八日の間に此港へ到著し、運上所其の外悉く受取られ候由、夫まで の内、當地は外國人預り支配いたし呉れ候樣、各國公使へ相頼まれ候、天子は去る二十二日、一萬人許の兵を引率して、大阪へ御幸御坐候、

三月二十六日

第一は新聞紙に關する論文の如きものにして加之も自家廣告を加へ、その次に今日の文學欄とも稱すべき時勢相應の詩歌あり、その次は外國の事に關して誤聞を取消の一項あり、

その次は西郷吉之助に關する豫報あり、その次に官報轉載ともいふべき「陸軍局の布告」あり、その次に最も振へるは今日の三面雜報に當るべきもの「喧嘩はめッたに始むべからずといふ話」に至りては、寧ろ滑稽にして頗る愛敬を含む、その次は汽船到著の報告また清國の事情一端を報ぜしに、これを唐國とせし點は面白し、その次に殊更ら「横濱新報告」とせしは今日に於ける本社獨得の種を誇りしもの、最後の一行「天子は去る二十二日一萬人許の兵を引率して大阪へ、御幸御坐候」とせり、

當時これを以て最も大膽に進歩し最も露骨に記載し最も新思想に富める社會の木鐸とす、今日の新聞紙上に比すれば、果して如何、殆ど隔世の感あるべし、

さらに面白きは明治六年一月一日發兌

壬申十一月官許

と捺印せる慶應義塾の藏版にして、福澤諭吉著の改曆辨なるものあり、その一月一日より大陰曆を改め太陽曆とせしがために

して、卷末に「時計の見樣」とせる一文、これを今日に見れば、あまり人を馬鹿にしたる著述となるべし、されど當時は時務を解せる學者の本分として天下に示せるもの、いかにも深切を盡せり、

馬鹿げたれど今日の人間、先覺者に對する感謝の念を以て、一應これを讀まざるべからず、その全文を左に揭ぐ、いふまでもなく假名を附せり、

時計の見樣

西洋にては一晝夜を二十四時間に分つゆゑ彼の一時は日本の舊半時なり、其半時を六十に分ツてこれを一分時（ミニウト）といふ、亦この一分時を六十に分けて（一セカンド」といふ、一「セカンド」は大抵脈の一動に同じ、偖時計の盤面を十二に分ち、短針は一晝夜に二度づゝ廻り、長針は二十四度づゝ廻る仕掛にせり、先づ正午又は夜

半十二時を本とし、この時には短針も長針も正しく重なり合うて十二時の所を指す、これより段々に右の方へ廻り、短針の一時を指すときは、長針は盤面を一周して六十分時を過ぎ、又十二時の處に戻り、これより亦次第に進み、短針の一時と二時との間に來るときは、長針も盤面を半分廻りて三十分時を過ぎ、丁度六時の處に來れり、故に時計を見て時を知るには、先づ短針の指す所を見て次ぎに長針の居處を見るべし、譬へば短針の指す所九時と十時との間にして、長針の指す所二時の處なれば、九時過ぎ十分時なりと云ふことなり、又短針九時と十時との間を半過ぎて十時の方に近寄り、長針も進んで八時の所に來れば、これを十時前二十分時と云ふ、即ち其二十分時とは長針の十二時の所に至る迄二十分時あるといふことにて、何れも長針は十二時を本にし、盤面にある六十の點を數へて何時何分時といふことを知るべし、左に示す時計の圖は九時過ぎ二十三分時の處なり、（此處に時計の圖あり）

今を去ること僅に四十年の昔、一代の學者たる福澤翁のため、天下いづれも時計の見樣を教へられたり、加之も小兒の手を取るが如くに教へられたり、これを今日の社會に比すれば、ます〳〵今昔の感に堪へず、

さらに今日の人間、飛行機を見るために群集雜踏せるも、幾十年の後また今昔の感に堪へずして、大正年間の馬鹿野郎はワザ〳〵飛行機見物に出掛けたと笑はるべし、

貞操問題

近來の社會は問題の社會にして、實は始めより問題にもならざる事を殊更ら問題に擔ぎ出して騷ぎ廻り、その問題を踏臺として自己の米代にする太い奴あり、

加之も問題ばかり多くして、一も解決なく、また解決なしと雖も世人これを怪しまず、すぐ後より新なる問題を起して、問題また問題の世の中、結局は解決を得るがための問題にあらず、たゞ問題だけの問題なり、

その問題中、聊か問題らしき問題は、近來に於ける婦人の貞操問題なり、

そも〳〵貞操を問題とするは、既に貞操を沒却せる問題なれど、今日の社會、この貞操問題を以て最も有力なる問題とせり、實は貞操問題に大騒ぎせざるべからざる男女間に於て雙方お互に其まゝ捨てゝ置けぬ問題なるが故なり、

元來この貞操なるもの、その無代價なるところに最も尊重すべき價値ありて、いはゆる不換金の國寶に等しき筈なれど、今日の貞操は次第に麁悪となり空虚となれるがため、なさけない哉、竟に人道の範圍を脱し德義の領分を離れて、殆ど社會の賣買物と等しき觀あり、

もし今日或一部の婦人をして、遺憾なく思ふまゝを云はしむれば、妾は貴君のため强ひて貞操を保ツてあげますから、貴君は力の及ぶかぎり働いて妾の貞操に對する多大の報酬を捧げ、また絶えず感謝の意を表して妾のいふ通り自由自在におなりなさい、さもなくば妾は妾の貞操を勝手に外へ分割し若くば轉じて仕舞ひます、その時に後悔しても無效ですぞ

といふが如し、

もし今日或一部の男子をして心體ありのまゝに白狀せしむれば、どうか僕のために貞操を保ツて下さい、仰せの如く僕は出來るだけの力を盡して貴女の歡心を迎へますから、何卒その貞操を他へ分與せず若くは轉化せず、願はくは、僕一人に占有の光榮を戴きたいといふが如し、

これが今日の男女間に於ける赤裸々の問答なり、婦人は貞操を以て婦人の最も誇るべき淑